

印西地区環境整備事業組合
次期中間処理施設整備事業地域振興策検討委員会 全文会議録

| | | | | | |
|---------|---------------------|-----------------|----------------------------|---------------------------------|---------------|
| 開催回数 | 第4回 | | | | |
| 開催年月日 | 平成27年8月30日(日) | | | | |
| 開催時間 | 13:00~15:40 | | | | |
| 開催場所 | 印西地区環境整備事業組合 3階大会議室 | | | | |
| 参加者 | 学識経験委員 | 国立大学法人千葉大学名誉教授 | | 委員長 | 福川 裕一 |
| | | 株式会社ちば南房総 取締役 | | 副委員長 | 加藤 文男 |
| | 公募による関係市町委員 | 印西市公募住民 | | 委員 | 黒須 良次 |
| | | 白井市公募住民 | | 委員 | 渡邊 忠明 |
| | | 栄町公募住民 | | 委員 | 小野 明 |
| | 管理者が必要と認める委員 | 印西市吉田区 | | 委員 | 大谷 芳末 |
| | | 印西市吉田区 | | 委員 | 齋藤 敏美 |
| | 事務局 | 印西地区環境整備事業組合 | | 事務局長 | 杉山 甚一 |
| | | 印西クリーンセンター | 次期施設推進班 | 工場長 | 大須賀 利明 |
| | | | 次期施設推進班 | 主査 | 浅倉 郁 |
| | | | 次期施設推進班 | 主査補 | 大野 喜弘 |
| | 次期施設推進班 | | 主査補 | 川砂 智行 中野 竜一 | |
| | 関係市町 | 印西市環境経済部クリーン推進課 | | 主査補 | 小林 政弘 |
| | | 白井市環境建設部環境課 | | 主査 主事 | 金森 隆 佐藤 和範 |
| | | 栄町環境課 | | 課長 | 池田 誠 |
| コンサルタント | 株式会社 エックス都市研究所 | | 主任担当者 担当者 担当者 担当者 | 中石 一弘 鈴木 修 秦 三和子 村上 友章 | |

- ※ 欠席：政所利子委員（学識経験委員）
- ※ 未選出：松崎区委員（管理者が必要と認める委員）
- ※ 傍聴人：1名

| 次 第 | 頁 |
|-----------------------------|----|
| 1 開会 | 3 |
| 2 会議録について（第3回会議） | 3 |
| 3 施設整備基本計画検討委員会第4回会議の報告について | 4 |
| 4 地域振興策に関する意見書について | 5 |
| 5 地域振興策のアイデアについて（再審議） | 6 |
| 6 地域振興策の総合パッケージ（案）について | 9 |
| 7 その他 | 44 |
| 8 閉 会 | 46 |

次第1 開 会

○中野竜一（事務局）

定刻となりましたので、ただいまから印西地区環境整備事業組合次期中間処理施設整備事業地域振興策検討委員会の第4回会議を開会いたします。

まず、事務局から3点ご報告させていただきます。1点目につきましては、政所副委員長から所用のため欠席とのご連絡をいただいております。

2点目につきましては、本日の出席委員でございますが、7名でございます。よって、附属機関条例施行規則第2条第2項で規定する必要出席委員数である過半数の出席を満たしております。

3点目につきましては、周辺住民委員として選出をお願いしております印西市松崎区でございますが、現時点においても委員選出をいただいております。ご報告は以上でございます。

それでは、開会に当たりまして委員長のご挨拶をお願いいたします。

○福川裕一（委員長）

めっきり涼しくなり過ごしやすくなりました。本日も頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、議事に入る前に、会議録署名委員の指名を行います。今回は加藤副委員長と齋藤委員にお願いします。よろしくをお願いいたします。

次第2 会議録について（第3回会議）

○福川裕一（委員長）

それでは、まず次第の2番目の第3回会議の会議録についてお願いします。

○川砂智行（事務局）

それでは、ご説明いたします。次第の2番、第3回会議の会議録ということで、まず資料外別添①をごらんください。こちらは、先月の7月26日に開催いたしました第3回会議の全文の会議録でございます。既に委員長と会議録署名委員のご確認が終わり、組合ホームページに掲載しております。

次に、資料外別添②をごらんください。こちらは、同じく第3回会議の概要版の会議録でございます。全文の会議録と合わせまして、こちらも組合ホームページに掲載しております。

ご説明は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございました。

何かご意見、ご質問ございますか。

○渡邊忠明（委員）

はい。

○福川裕一（委員長）

どうぞ。

○渡邊忠明（委員）

第3回全文会議録はホームページにアップされているのですか。

○川砂智行（事務局）

すいません。大変失礼いたしました。第3回会議の会議録なのですが、まだホームページに掲載しておりません。これからとなります。失礼いたしました。早急に組合のホームページのほうに掲載をさせていただきます。

○渡邊忠明（委員）

誤字脱字がありましたものですから。

○福川裕一（委員長）

ほかにいかがですか。

[発言する者なし]

○福川裕一（委員長）

では、次に行きましょう。

次第3 施設整備基本計画検討委員会第4回会議の報告について

○福川裕一（委員長）

それでは、3番目の施設整備基本計画検討委員会の第4回会議の報告についてお願いします。

○大野喜弘（事務局）

それでは、ご説明をさせていただきます。

お手元の資料外添付③をごらんください。8月23日に開催をいたしました施設整備基本計画検討委員会の第4回会議の審議結果につきましてご説明をさせていただきます。

まず、5番の検討委員会等スケジュールについてでございますが、プラントメーカーアンケートのこちらの結果を整理いたしまして、第4回会議で審議いただく予定であった内容を会議資料として提示することができなかつたことから、第5回会議での審議とし、結果最終答申案をまとめるまでの間で審議日程の調整を図らせていただくことのご了解をいただきました。

次に6番目でございます。リサイクルセンターにつきましては、平成25年度に改定をいたしましたごみ処理基本計画の平成40年度計画目標処理量を踏襲し算出した日量15トンを目処の処理規模とし、リサイクルプラザ機能と内容につきましてご紹介をさせていただきました。

また、裏面、2ページ目をごらんいただければと思います。7番、その他の（2）番、施設整備基本計画と連携する地域振興策案については、両検討委員会におけます検討範囲等について、ここに添付をさせていただきました資料によりまして具体例を示し、地域振興策を展開する場所の施設機能等を損なわない範囲で活用内容を検討するということをご了承いただきました。こちらは、もうしばらくお時間をいただければと思います。

会議当日お配りをさせていただきましたものが最後につけさせていただいているのですけれども、まずこちらの3つの背景別にご了承いただきました内容なのですが、まずこちら表の上段でございます煙突壁面などの次期中間処理施設機能等、あと、こちら表の下段になります。啓発効果等の拡大を背景として、道の駅などの建設候補地の外で展開いたします個別の地域振興策は、地域振興策検討委員会でご検討いただきまして、施設整備基本検討委員会で検証するということになりました。

それと、あとこちら表の中段でございます本来機能を建て替え用地とする地域振興策につきましては、災害時の災害廃棄物ストックヤードとしての活用を優先に施設整備基本計画検討委員会で検討し、検証するというふうになったものでございます。

あと、すみません、ちょっと長くなっているのですが、最後に（3）、その他の②番と

いたしまして、施設整備基本計画検討委員会の第6回会議の日程を10月18日の日曜日から前日17日の土曜日に変更させていただくこととお諮りさせていただきまして、先週末までの間に調整、確認をさせていただきまして、日程の変更が決定したところでございます。

説明は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございました。

今の説明について何かありますか。

はい。

○渡邊忠明（委員）

地域振興の委員として言うのは適切かどうか疑問なのですが、リサイクル品の展示販売とあるのですが、今までこのクリーンセンターで使えるものを再利用できるもの、リユースできるものを販売していましたけれども、それは入らないのですか。

○大野喜弘（事務局）

そちらも今こちらクリーンセンターの1階で不要品のほうの修理をいたしまして、活用させていただいておるのですが、それにつきましても施設整備基本計画検討委員会のほうで進めさせていただく予定となっております。

○渡邊忠明（委員）

はい。

○福川裕一（委員長）

はい。

○渡邊忠明（委員）

今の世の中、リサイクルよりリユース優先ということっているので、施設整備基本計画検討委員会では、その辺を踏まえて適切に対応していただきたいと思います。

○大野喜弘（事務局）

承知いたしました。

○福川裕一（委員長）

ほかにいかがですか。

[発言する者なし]

次第4 地域振興策に関する意見書について

○福川裕一（委員長）

では、次第の4番目、地域振興策に入ります。地域振興策に関する意見書、事務局から説明をお願いします。

○川砂智行（事務局）

ご説明いたします。

参考資料の1及び本日追加配付いたしました意見書1通をごらんください。あわせて渡邊委員から2通、大谷委員から2通、合計4通の意見書をご提出いただいております。

関係する議題といたしましては、5番の地域振興策のアイデアについてとありますので、その審議の際に必要な応じて提出委員から内容のポイントなどをご説明いただければと存じます。

ご説明は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

よろしいですか、今のご説明で。

〔発言する者なし〕

次第5 地域振興策のアイデアについて（再審議）

○福川裕一（委員長）

それでは、次に行きまして、5番目の地域振興策のアイデアについてです。まず、事務局から説明をお願いします。

○川砂智行（事務局）

ご説明いたします。

次第をめぐっていただきまして、会議資料の1ページをお開きください。委員の皆様には、あらかじめ本資料の説明文を送付しておりますので、ここでは簡単にご説明をさせていただきます。

前回会議でご提出した資料との主な相違点でございますが、2ページ以降の表に収益性の欄を追加したこと、また概要欄などにおける記述内容を適宜追加及び精査したこと、またグレーの網かけをした地域振興策については、地域に求められる将来像に合致しないと考えられることや、ほかのアイデアと統合したことなどによりまして、廃案といたしました。

また、6—12のUターン、Iターン助成と6—13の可搬式蓄電池を追加いたしました。

次に、参考資料の2をお開きください。関連して作成したのですが、前回会議でご提出した用語集をごらんのとおりの内容で拡充をいたしました。

ご説明は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございました。

これに関連して、意見書をいただいている方で、ここでお話になりたければお願いしたいと思いますが。

渡邊委員は、これに関連してご発言ありますか。

○渡邊忠明（委員）

私の意見、事前にメールで配信していただいたのですが、それもちょっといろいろ修正しておりますので、その点だけ申し上げたいと思います。

まず、参考資料の1—1、里山の重要性と保全上の課題ということで、私、吉田区ばかり目に行って、そもそも里山とは何ぞやというお話を落としていましたので、参考資料1—1の真ん中ほど、「なお」ということで、里地里山を概念的に提示すればということで、そもそも里山とは何ということを追加させていただいております。

あわせて1—2、落葉広葉樹林の非常に大事な点は、萌芽更新といって、脇芽で放っておいても芽が出てくるという非常に便利なもので、これが非常にポイントになるので、「なお」ということで、上のほう追加させていただいております。というのは、こういう萌芽更新ということで、パッチ状に切っていくということが下に書いてあるいろんな大事な植物を保全していくということですので。

それから、3の直前、括弧書きで、すすき草原に代表されるのは省略しましたがけれども、すすき公園・芝草原というのを入れておかないと、またラジカルエコロジストに何かいわれると悪いので、「・芝草原」と入れさせていただいた次第です。それで、これは皆さん共通認識ということで整理させていただいた話ですので。

もう一つ、第4回会議に向けてということでございますけれども、まず参考資料1—

4、大きな括弧で注というのを入れていますけれども、要するに私の書いたのだと、何か一方的に国の施策にダイバーシティー、アイデンティティがないということなのですが、要するに国の施策というのはこういうことで、ダイバーシティー、アイデンティティを求めるのは限界がありますよということを入れさせていただきました。

それと、この意見書を出した後、今年の6月5日閣議決定の環境白書読みましたら、私に似たような表現があったので、最近パクリというのがいろいろ言われているものですから、1—5の上のほうで、「なお」ということで、本年6月5日閣議決定のこれこれには似たような表現があるけれども、これは昔から環境省が言っていたことで、特段新しいことではないよということと、最後結びが、その白書の先進事例、ヒントは与えてくれるがということなのですが、要するにちょっと物足りないなという意味で、そんな表現になっております。

それと一番下のほう、上杉鷹山のことをだらだら書きましたのは、非常にこの吉田地区の地域振興を考えるに当たって、すごく哲学的に裏打ちしてくれるところがあったので書いたのですが、私中学校のとき読んだ本のうろ覚えだったもので、流し読みをして、参考になる点をつけ加えております。

それともう一つは、絹織物、私、米沢で十日町からだったと聞いたのですけれども、2つの本に絹織物は十日町から技術者を招いたという話が出てなくて、かわりに苧（からむし）という、麻に近いやつなのですけれども、これらの技術者を呼んだという話があったので書いておきましたけれども、あと漆だとか藍だとか、そういったいろいろ金になることをしましたよというお話を加えさせていただきました。また吉田区、非常にお正月、皆さんでお迎えになられるという、それと似たような儀礼を創設して振興したというようなお話、参考になりそうなお話をつけ加えさせていただきました。

それと、おもしろいなと思ったのは、農民がくいを打って、握り飯だとか農産物売っていた、要するに今でいう無人販売が江戸時代に行われたというので、おもしろかったです。ちょっとつけ加えさせていただきました。これは余計な話です。

あと、参考資料1—7で、私昭和50年代、徳島県の山村で年寄りがもみじだとかお料理の飾りなどを集めて500万円上げているよというお話を書いて、皆さんお読みいただいたと思うのですが、同じく今年環境白書の第3章に同じ例を挙げていて、今は億単位ということだったのですけれども、偶然同じ例が載っていたので、これもパクリではないよということで追加させていただきました。

以上皆様お読みいただいた後追加した点だけ申し上げます。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございました。細部までご意見ありがとうございます。

それと、大谷委員も今ここでよろしいですか。

はい。

○大谷芳末（委員）

8月11日に提出しました意見書につきましては、意見というよりも要望的な形で書いておまして、狙いは今地域振興策をして、個別のアイデアがおよそ百数十項目上がっているわけなのですけれども、それを1個1個地域に求められる理想像、大方針がありましたが、1個1個どういうふうにミートするかなというのを簡潔に、簡単に評価して点数化してしまって、どれが高いか低いかというのを考えるのと、同時にその施設をもしつくれた場合、どれぐらいの収益が見込まれて、どれぐらいの維持費がかかるかという仮定値を入れたマトリックスをご提案しています。

これは、エクセルで配布いただいていますかね。そうすれば私が勝手に評価値、あるいは年間集客数とか、そんなのを平均してどのぐらい消費するかなというものを仮定値をみんな入れていますから、これを自由にいじると、何がウエイトが大きくて、どれが

プライオリティーが低いかというのが一応考えられるようにつくったツールですので、これも私なりにどれを優先するか、どれが余り効果ないかというのを考える資料としてご提案したものです。

農業としては、大方針の誇りを持てるかとか、いろいろな項目がありますけれども、それにミートしないものは評価項目が低いものはプライオリティー下げるべきだろうし、しかも経済的に評価項目が低いのに、維持するためにランニングコストがとてもかかるというものは、かえってつくるべきではないだろうなという意見もありますので、そういう考えにご利用いただければということをつくった資料です。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございました。あとで、また適宜参考にしましょう。

それで、大谷委員の意見書は後からにしますか。

○川砂智行（事務局）

ここでお願いします。

○福川裕一（委員長）

ここでやりますか。

はい。

○大谷芳末（委員）

直前になりまして申しわけございません。昨日こちらのほうにレポート上げさせていただいたばかりです。

趣旨を端的に申し上げますと、第3回でこの膨大な振興策のうちの順番からみて一番上に里地里山のことがあるって、2番目に農業振興というのがあって、その後いろいろ基幹産業とか、そういうふうに進んでいて、大分里地里山、農業振興が盛り上がりましたので、そこをじっくり考えてみたわけなのですが、結論から言って、里地里山も農業振興もとても重い課題で、たった1年間で何か有効な施策を出すというのはとても難しい課題だろうということで、あと小野委員もそうですし、吉田区の住民もそうなのですが、里地里山、今ある資産を利用して観光資源としてできないかという案もあるのですけれども、まだ懐疑的な人が多いですね、委員会も、住民も。本当にそれで集客できるのという観点から見ますと。

もう一つ、今候補に挙がっている中心の道の駅ですが、これにもうちちょっと付加価値をつけて、他の道の駅にないような先進的な事例をつけたらどうかという発想で考えてみた内容です。その内容は、吉田スコーラの提案と書いてありますけれども、何物かちょっとわかりませんが、スコーラというのは学校という意味だそうです。道の駅に加えて、農業振興ということを入れた学習施設、おそらく日本の農業を憂えている人は全国に多数いて、何十年やってもなかなか効果が出ないということだと思いののですが、当然それにはいろんな技術革新とか、革新的な農業経営だとか、そういうのを何十年もかけてつくり出していくものだと思うので、できれば農業振興に力を入れた教育機関というふうな色合いにしたらどうかというのが提案です。

おそらく今、例えばあの美田をどう保とうかと考えても、具体的な範囲では1年では出ないと思いますし、何とか保全の努力はしても、それにしても非常に長くかかることで、今この中期的なクリーンセンターのプロジェクト、ゴーといっても10年ぐらいかかる。そういうスパンで考えて、あの吉田区でできるということは、将来の農業をどうしていこうか、環境をどうしていこうかという考える学習の場にして、そういう人材を育てるといふ場所、これは今決断してできるようになるというふうに考えました。そうすることによって、里地里山だけではなくて、吉田区のスコーラの機能で話題性があるという、集客性が上がって、少しでもにぎわいをつくるような施策をもう一つつくってというのが提案で、同時に吉田区が今悩んでいるというのは一例で、里地里山の保全とか

農業振興、難しい課題で悩んでいるのですけれども、これは決して吉田区だけの話ではなくて、おそらく3市町、千葉県、全国共通の問題だと思うのです。

そういう意味では、こういう環境学習と農業学習の拠点化をして、例えば吉田の今かろうじて残っている美田を何とか保ってショールーム化するとか、あるいは主要基幹事業の道の駅の中を先進農業の提案型ショールームにするとか、あるいはそういう啓蒙を図るとか、必要に応じていろんな学習構想を提供できるとか、そういうのは実現性ありますので、こういうふうな形にしていって、広くこの場所を中心に3市町の人も利用していただいて、皆さんが環境をどうしようか、農業をどうしようかと考える場所にしたらいいいのではなかろうかと、そういう広域性もあるなという形で提案させていただいております。

以上です。

○福川裕一（委員長）

ありがとうございます。学校という機能という話でした。

では、今のご意見を踏まえてお伺います。

○渡邊忠明（委員）

大変地道にお考えになって、結構なことだと思うのですけれども、環境教育については、2市1町非常に熱心な方が多いので、余り悲観的にならなくてよろしいのではないかなと。要するに人に来てもらって、道の駅で食べたり、サンセットスパに入ってもらったりしてお金を落とすということで、ここは吉田区だけで担うのではなくて、2市1町全体のそういう識者に手伝ってもらおうという考え方で、もう少しお気楽に考えていただいているのかなと思います。

単なる環境白書ではなくて、私も前々回の意見書に書きましたように、食育教育だとか、食農教育だとか、もっと幅広い活動の拠点にご利用いただく。それももっと大事なことです。

以上です。

○福川裕一（委員長）

農業をやる方用に、もうちょっと広げていくということですね。

ほかに今のあたりについてご意見、意見交換をして次の問題に入っていきたいと思っております。

[発言する者なし]

○福川裕一（委員長）

では、視察の件がありましたね。

○大谷芳末（委員）

この吉田スクーラの件と、今おっしゃられましたような、いっぱい項目あるのですが、先ほどご紹介したシミュレーションシートがありますけれども、里地里山農業振興も余り収益には関係ない施策ですので、なるべく排熱を最大限有効利用して、しかも農業振興にもつながってというふうなことをフォーカスした上でいろいろ調べてみた結果、こういうところに行ったらいいですよというふうな一つのご提案です。

○福川裕一（委員長）

次でまとめてやりましょうか。

次第6 地域振興策総合パッケージ（案）について

○福川裕一（委員長）

それでは、次に6番目の、今日の本題で、地域振興策の総合パッケージ、今までお話

いただいた資料やリストを真ん中のテーブルの上にある地図上に落としながら、全体の構想をつくってみまして、エレメントにばらばらになっていたのをつなぎ合わせていくということだと思いますけれども、事務局から説明をお願いします。

○川砂智行（事務局）

それでは、まずそちらの航空写真を用いてのディスカッションはこの後お願いいたしまして、まず最初に資料のほうのご説明を先にさせていただければと思います。

会議資料の38ページをお開きください。委員の皆様には、こちらあらかじめ説明文を送付しておりますので、簡単にご説明いたします。この資料につきましては、地域振興策のアイデアを展開する現場別にまとめたものでございます。タイトルの下の主文につきましても、これまでの審議を踏まえ、簡明にまとめました。

次に、展開する現場の1番でございますが、建設候補地に隣接する台地としております。道の駅を中心に親和性の高い各施策を一体的、複合的に展開する内容でございます。

次に、39ページをごらんください。展開する現場の2番でございますが、建設候補地としております。こちらでは、次期中間処理施設の機能や建て替え用地を活用する策をまとめております。

次に、展開する現場の3番でございますが、集落としております。主なものとしたしましては、インフラ整備関係でございます。

次に、40ページをごらんください。展開する現場の4番でございますが、里地里山としております。こちらでは、谷津田や森を積極的に活用する策をまとめております。ただいまご説明した総合パッケージでございますが、各地域振興策には大きな共通点がございます。それは、収益性の追求でございます。各地域振興策につきましては、一見するととりとめがなく、また収益と直接関係のないものも相当数ございますが、それらの集大成、連携効果により、特ににぎわいの創出ですとか農作物のブランド化に大きく寄与いたしまして、確たる収益構造が構築されるものと考えております。

次に、参考資料の3をごらんください。こちらは、各地域振興策の主な属性を一覧としたものです。マル・バツなどの判定につきましては、今後の審議に応じて変化するものと考えられますので、参考程度にごらんいただければと思います。

次に、参考資料の4をごらんください。こちらにつきましては、展開現場別にまとめた総合パッケージを道の駅を中心としたイメージ図として分解、整理したものでございます。

次に、参考資料の5をごらんください。こちらは、次期中間処理施設が稼働開始する予定の平成40年度前に供用開始できる地域振興策と、稼働開始後に供用開始する地域振興策を大まかに分類したものでございます。

ご説明は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

どうもありがとうございます。

では、説明が終わりました。それでは、委員のみなさん真ん中のテーブルに集まってください。

○渡邊忠明（委員）

その前に。

○福川裕一（委員長）

はい、どうぞ。

○渡邊忠明（委員）

40ページ、2—7の贈答米、私しつこく言っているのですけれども、要するに今もう企業は虚礼廃止で、そんな贈答なんて余りしないので、むしろもっと広く、援農というのが今、企業というのは社会貢献でボランティア一生懸命やりましょうという中の一つ

のメニューで、援農というのは非常に見やすいボランティア活動で、割と各企業は力を入れているので、要するにそういう提携した企業の社員がまず食べてもらうというようなことで、贈答と小さく考えるのではなくて、もっと幅広く考えていただいて、何か事務局からいただいた資料でハッピー米ですか、こういうような発想もありますし、もっと幅広く売れるようなことを考えていただきたいのと、もう一つ、里地里山との連携からいくと、要するに林の下草で堆肥をつくって、すき込んで、それもボランティアにやらせるのですけれども、有機農法ということでブランド化して、それで幅広く売れるような。そういう贈答米という小さいことではなくて、幅広く考えていただきたいなど。これ要望です。

○福川裕一（委員長）

大谷委員のほうで、贈答米の評価は。

○大谷芳末（委員）

割と高いです。

○川砂智行（事務局）

では、ただいまのご意見に関してなのですけれども、恐れ入りますが、2—7の、今現状贈答米としているものなのですけれども、こちら会議資料の8ページのほうで、ある程度詳細なご説明をしているのですけれども、表現の内容も含めて、もうちょっと拡大させるような形で修正をする方向で。

○福川裕一（委員長）

ネーミングをもうちょっと考えましようか。

○川砂智行（事務局）

そうですね。

○渡邊忠明（委員）

現に私が渡した意見書にも書いてありました小川町ですと、建築業者と農家とタッグを組んで、そして社員が買ってくれているわけです。

○福川裕一（委員長）

千葉でもいろいろと取り組んでいますね。小湊にある会社も、里山の支援に入って従業員も取り組んでいます。

○渡邊忠明（委員）

要するに幅広く売れることを考えましようということですか。

○川砂智行（事務局）

では、そうしましたら、これちょっと内容考えてみますので、後ほど皆様にメールのほうでご連絡さしあげます。

○福川裕一（委員長）

そういうことはどんどんやっていって、ブラッシュアップしていきましょう。

○小野明（委員）

ふるさと納税の、見返りの産品にもなりますからね。だから、うまくブランド化すれば、吉田区の中で、米に限りませんが、今ふるさと納税が増えていますから、そういう意味では贈答米も一つ大きな産品ではあるのですけれども、ワンオブゼムとしてはね。企業、ふるさと納税、そういうこと使った販売の一つのサンプルとしての贈答米であれば、それはそれで生きてくるのではないのでしょうか。贈答米に限定するわけではないのですけれども。野菜でもいいのですが。

○福川裕一（委員長）

いかに吉田区でつくった産品を広げるかと。

○小野明（委員）

社員として買うのもあるでしょうし、ふるさと納税としてもですね。

○福川裕一（委員長）

ほかに今までの範囲で何かございますか。
どうぞ。

○加藤文男（副委員長）

資料外別添の3で配付されたものですが、配付いただいている資料の39ページと言ったほうがわかりやすいですね。次期施設の案のほうから、防災拠点化構想ということが7—2で出てきていますよね。これもできれば、参考資料4—1、配付されている、ここに6番目に防災拠点ということで表現してしまったほうがいいと思います。というのは、国交省が道の駅を認定する要件の中で、防災拠点化ということをかかなり持ち出しているのです、できれば6番目にも防災拠点という形で入れてしまっていていいと思います。もし防災訓練ってどういうことをやるのというのが、また皆さんのアイデアでどんどん高まっていくということでは、例えばここで受水槽があったとしたら、受水槽に蛇口をつくるだけで水が出てくるのです。非常用の備蓄になってしまう。あとトイレの水が使えないときに、トイレ用にマンホール型のトイレというのですか、防火水槽の位置の問題とか、施設全体の検討するには、防災拠点という形で入れていってしまったほうがいいのでしょうか。今の時点で入れてしまったほうが。

○福川裕一（委員長）

①、②、③、④、⑤、もう一つ防災拠点というのがあります。

○小野明（委員）

私もそれ賛成でございまして、これ国土強靱化政策とっているから、防災拠点入れておいたほうが、国からのいろんな予算も、いろんな政策の方向性も反映するので、多少今後のレポートの中で、ぜひ防災拠点についてと思ったものですから、今のご意見大賛成でございまして。

○福川裕一（委員長）

はい。

○黒須良次（委員）

ちょっと確認なのですが、先ほど大谷委員のほうから収益性等分析資料がございましたけれども、その中でやはり一番大きいのは、複合的な集客機能を果たす道の駅的な集合体ですね。それからもう一つはスパ関係が有効。集客力が人気が上がっているのですか、どちらにおいても通年大きい。これらが安定的に稼働すると、一つの大きな歯車になって、ほかのところにも非常に影響が出てくる可能性がある。先ほどの教育機能になるとは思うのですけれども。

問題は、その道の駅にしる、スパにしる、立地条件というのが結局非常に左右する。それは、理念性だったり、シンボル性だったり、ランドマーク性だったり、知名度ですとか、行きやすさですとか、利用しやすさですとか、いろんな、あるいはその周辺の地域も入れるとか、いろんな要素がかかわってくると思うのです。この場合、いろいろ田園的な魅力づくりというのが、今後トータルにやっというところであるのであれば、まず必要条件として、例えば、ほかの道の駅でも立地条件づくりをいろいろやられていると思うのですけれども、基本的にここで今期待される道路インフラは、県道263号線、八千代宗像線ですか、これがずっと八千代のほうから16号を通過して、この地区を通過して、北のほうは印旛日医大駅のほうまで、そこが印旛沼周辺のアジサイ通りと通称言われている、あっちのほうに連結して、日医大からほんの10分もかからず、もしかしたら来れるようなゾーンになる。この県道263号線の持つ意味というのは非常に大きいと思います。これをうまく、この道の駅的なこととリンクさせなければ、これは成功しないのではないかと。

もう一つは、航空写真の上に黄色い点線で書いている印西市の市道ですか。これと県

道、これの接点というあたりのゾーンというのがやはり一番有望なゾーンだと思うのです。もう一つ非常に重要なのは、市道のほうで、印西の中央駅ゾーン、それから牧の原ゾーンからのアクセスとして、これはもうばっちりなのです。そうすると、この2本の県道と市道でもって、この地区の立地条件は非常に変わる可能性がある。

ただ、問題はこの市道の幅員規格ですね。それから、県道と市道との接点のエリアの状況ですとか、そういったものをうまく周辺も少しアレンジして考えないと、この場所はやはり活かさないのではないかとということがちょっとあるのではないかと思います。

○福川裕一（委員長）

ありがとうございます。

道の駅ですからね。便利な場所でないとは本当はいけないのだけれども、そうもいかなるところがある、そういう状況をどうつくるかということもあるのですけれども、ほかにありますか。よろしかったら、真ん中へ行って、今の話の続きをするのですけれどもよろしいですか。

○小野明（委員）

今の件について、事務局の説明の文書の中でアンデルセン公園の例を挙げていますよね。その中で、交通利便性の悪さを苦にしていないというのがありますけれども、交通利便性の悪さ、私たちが今おっしゃったように、道路の関連で、立地の条件でね。他方事務局の資料で、船橋市のアンデルセン公園は交通利便性の悪さを苦にしていないというのがございます。これは、交通利便性の悪さを苦にしていないけれども成功している。つまり交通利便性は悪いのだけれども成功していると。一番のポイントは何だと事務局は理解されていますか。

○川砂智行（事務局）

今の交通の関係は、もちろん交通の便がいいにこしたことはないと思います。ただ、交通の便が一般的に悪いというような状況の場所であっても、集客効果に関して圧倒的な結果を出している施設があるということでご紹介したのですけれども、事務局といたしましてはアンデルセン公園、これは今後、具体的に調査のほうに行きたいと思っているのですが、いろいろとインターネット上の評判ですとか、あと施設のホームページを見る限り読み取れることといたしましては、やはり複合施設として機能しているのだなど。ある特定の施設展開に特化しているのではなくて、いろいろな魅力があって、それらの集大成として一日遊べる施設になっているのだなどというような印象は現時点では持っております。

○小野明（委員）

一種のテーマパーク的なところですか。わくわく感とか、そういうことですよ。

○川砂智行（事務局）

そのとおりです。

○福川裕一（委員長）

世の中の的にはチボリ公園など、みんな失敗していますが、船橋のはうまくいっているのです。

○加藤文男（副委員長）

ちょっと余分なことを申し上げますけれども、今まで吉田区の地域の振興、図書館などの検討を進めてきました。ここで、道の駅という概念がぽんと出てきて、道の駅という概念はすごく親和性が高いので、全ての事業をずっと吸収していくのには、道の駅という概念がいいのですけれども、今度はこの吉田区、この地域の振興を図るための事業が、道の駅をつくるための事業に変化していつてしまうことをかなり恐れているのです。ですから、道の駅の要件をどんどん整えていくのではなくて、道の駅をつくるだけでは

なくて、絶えず吉田地域の振興にセットバックというのですか、一度戻って踏み出す、戻って踏み出すというような事業をしていただきたいと思います。というのは、一番の黒須委員のご意見でちょっと心配してしまったのは、道の駅の立地は、もう車が通っていけば一番いいわけで、最低でも1万台近く通れば何とかいくと。ただ、そうすると吉田地区の振興のためにやった事業が、交通の利便性だけで動いていってしまうことが果たしていいのかどうかということも議論になると思うのですけれども、そのところをちょっと問題が。

○渡邊忠明（委員）

私の頭の中では、道の駅というのはいわゆる国土交通省の定義の道の駅ではなくて、道の駅的な施設というふうに、的が入っているのではないかと私は理解して話を聞いていたのです。

○加藤文男（副委員長）

国土交通省の道の駅の認定要件というのは非常に甘いというか、枠がコンクリートになっていなくて、機能性だけです。4つの機能と言われてはいますが、その4つの機能だけで。

○渡邊忠明（委員）

たまたま道の駅、道の駅と皆さん解釈しているようではございますけれども、初めから私、道の駅というのは便宜的に使われた言葉であって、いろんな食べる、売る、湯につかる、遊ぶ、いろんな機能を持った施設をたまたまそう言ったというふうに認識しているのですが、違いますか。

○加藤文男（副委員長）

ここで道の駅論をやってもあれなのですけれども。

○渡邊忠明（委員）

いや、要するにそのイメージをはっきりさせないと。

○福川裕一（委員長）

いわゆる道の駅をつくらうとして始まったわけではないけれども、いろいろ考えていくと、世の中でやっている道の駅の機能に近いものがあるということで道の駅が出たのではないと思うのですが、あくまでも道の駅をつくるつもりは基本的にはなくて。

○渡邊忠明（委員）

だから、道の駅的な施設という認識でいいのですよね。

○福川裕一（委員長）

そうだと思います。

○加藤文男（副委員長）

結果的には、道の駅の指定を受けると、おそらく入場者が、二、三十万上乗せされると思うのです。ですから、そういう関係の大きなパワーを持っているのですけれども、余りなぞらないような形で、吉田区の地域のために。最後に道の駅という名前をかぶせたほうがいいかなというぐらいの考えで。

○福川裕一（委員長）

道の駅というネーミングを登録してもらおうと、二、三十万人が増えるのですか。

○加藤文男（副委員長）

私の勘で十万は完全に乗るなと思っていたのですけれども、この間、国交省の方と話をしたら、そんなことはない。ですから、あの看板一つで。

○福川裕一（委員長）

逆に道の駅というところからある固定したイメージがぱっと湧いて、せっかくやっている施設が矮小化されるという、それもありますね。だから、注意したほうがいいですね。

○黒須良次（委員）

各委員がおっしゃった、要するにいわゆる道の駅的な事業に流れてしまうというのは、ちょっと危険という話は重々承知しておりますが、私が非常に懸念した点は、いわゆる道路ですね。特に新しくできる延長の市道と県道263号ですか、これの交差点のあたりの場所と今回の地区の立地関係、それから広域的に見ると、北のほうからは、例えばこの市道にぶつかってくるとすれば、この市道の構造、幅員ですね。歩きやすさ、要するにきちっとした道として認識できるかどうかということと、交通安全性とか、場合によってはサイクリングだとかも配置できるかもしれませんし、それが単に一般の市道の延長であるという規格でいいのかどうか。それから、やはり県道との関係での折り合いと、それから台地の上と下、おそらく構造点の下になると思うのですけれども、そこら辺をどういうふうに分けて見ていくかというのが道を選ぶ上で大切なことかなと思います。

○福川裕一（委員長）

もう何か決まっていることがあるのですか。ここにつくる市道の構造に関して特に想定しているものはあるのですか。

○川砂智行（事務局）

今、資料を下に降りて手配しておりますが、以前、基礎資料として周辺の道路計画でお渡ししたかと思っておりますので、それを改めて後でござんいただければと思います。

○福川裕一（委員長）

市道について、2車線、3車線といったようなものも何かあるのですか。

○川砂智行（事務局）

今の時点で決定しています道路構造の内容はありますので、それもちょっと後でご報告いたします。

○渡邊忠明（委員）

道の駅というのは、加藤副委員長ご専門だから言いたくないのですけれども、とにかく登録されれば、インターネットでぽっと検索できるし、それは抜群の宣伝効果あります。それと、栃木県で私二つ見たのは、メインルートから外れたルートからアクセスとして使っているところもありましたので、いろんなパターンがあるのかなというふうに思っていました。

○加藤文男（副委員長）

結構緩い仕組みになっているので。

○小野明（委員）

これ、仮称道の駅としたときに、この後おっしゃると思いますけれども、複合施設として位置づけないと、一步間違えたら、単なるJAがやっているような農産物販売所で終わってしまう感じになりますよね。来月の説明会のときに、こういう道の駅の構想を出すわけですよね。そうすると、私、吉田区の皆さんの本当の振興を、こういうのをやってほしいという需要がよくわからないものですから、何とも言えないのですけれども、そのレベル感というか、希望感というのと、この仮称道の駅にしましょう、この複合施設という壮大な構想との間のギャップというのが、これ大丈夫かなと思う。つまりそのギャップは当然行政のほうが、印西市が中心になって全面的に支援してくれるのでしょいうねという、何かそういうような期待感も持たせたときに、後から、いやそれは全部、この前の話で、この吉田区の支援、振興策の前提は吉田区が主体的に取り組むのだということがございました。あの主体的な取り組みという部分とこの壮大な構想の中で、どれだけ吉田区が、どういう形でインボルブしていくのか。つまり雇用であれば自分たちが雇われればいいのだけれども、自分たちが主体になったときに、当然いろんな負担も来るわけですね、人的な負担だとか。お年寄りが多い吉田区の中で、そういった従業員

というか、何か例えば人の手配だとか、いろんなことが出てきますよね。だから、そういう意味では、私も実は同じ別体系の懸念を持っているのは、青写真はいいのですけれども、この青写真と本当に地元が求めている吉田区の振興策とのギャップと、あるいは期待値、その辺で混乱、こんなはずではなかったと。こんなのだったら吉田区にクリーンセンターを持ってきてもらうということは拒否するよというちょっとその辺の懸念があるものです。案そのものはすごくいいのです。いいのだけれども、その辺大丈夫かなと思うのです。

○渡邊忠明（委員）

2回目の委員会でお願ひしたのは、もう少し吉田区で何人農家の人が出て、何をつくっているか教えてよという、やっぱりそういうのがないと同じことだと、そういうことになるのです。

○福川裕一（委員長）

しかし、夢を膨らませて現実化していくというプロセスに行ったり来たりがあっというと思うのですが。

○川砂智行（事務局）

まさに地元の皆様のご要望ですとかご意向ですとか、そういうのを確認していきながら、この委員会としての最終答申をまとめたいと思っておりますので、この委員会としてこういう形がいいのではないかとこの形でご提案をして、そして意見をいただいて、また必要な修正を加えて、ブラッシュアップを重ねていいものに仕上げていくというようなイメージで事務局のほうとしては考えております。来月の5日の意見交換会は、そういった地元の方々の生の声をお聞きする初めての大きな機会ですので、その中で今おっしゃったようなギャップについて深く考察のほうを深められればなというふうにも思っております。

○福川裕一（委員長）

それでは、空中戦していても仕方ありませんから。

○川砂智行（事務局）

では、椅子をご用意しておりますので、こちらにお移りいただいて。

○福川裕一（委員長）

座って始めましょうか。

道路の資料は準備できましたか。

○川砂智行（事務局）

それでは、今眼下にあります航空写真なのですが、委員長先生のお席の近くにあるものが建設候補地の周辺を拡大した台地を主に写したものです。それで、こちらのほうにつきましては、ちょっと広域的に写している、吉田区のほぼ全域が入っているかなというような航空写真になっております。

今その航空写真の上に2つフラッグがありますが、それについては次期中間処理施設ということで、そこに清掃工場ができるのだよというところでございます。

ちょっとここに、今百個弱の地域振興策があるのですが、それを簡単に説明しながら、その地域振興策のプレートのほうを置いていきたいと思っております。

○福川裕一（委員長）

その前に、さっきの道路整備の情報はどうですか。

○川砂智行（事務局）

今ちょうど事務室で打ち出しておりますので、後ほどご説明をさせていただきます。

○福川裕一（委員長）

これは県道ですね。

○川砂智行（事務局）

そうです。

○黒須良次（委員）

ここを今盛り土造成して、これがぐんとここが上がっていくのです。そうすると、この県道にぶつかります。ここから先は、通称アジサイ通りと言われていて、それが印旛日医大まで、病院のところまでですね。

○小野明（委員）

ほぼ確定なのですか。

○黒須良次（委員）

確定しています。

○大谷芳末（委員）

これが県道ですね。

今現在こう行っているわけです。

○加藤文男（委員）

それが今度変わるといえることですか。

○川砂智行（事務局）

この道路まではできています。買収がこの辺進んでいるのですかね。

○加藤文男（副委員長）

いつになるかわからないでしょうね。

○小野明（委員）

これ買収できるのですか。

○大谷芳末（委員）

この道路が、18年来、私がこちらに転入させてもらったときからです。

○黒須良次（委員）

あと、ここからここだけではないですか。あと、このところというか。

○加藤文男（副委員長）

1キロありますよね。

○小野明（委員）

この区間、これみんな住民の合意ができるのですか。

○加藤文男（副委員長）

いい勝負ですか。

○福川裕一（委員長）

主な入り口は、こっち側になるわけですね。向こう側ではなくて。

○川砂智行（事務局）

今、建設候補地がここで、一番近い現状の幹線道路としては、ここに県道がありますけれども、ただ将来計画、直近の将来計画として、ここに松崎吉田線という幹線的な道路ができ上がります。それで、将来的なものをにらむと、一番近い幹線的な道路はこの路線になるのですが、アクセス道路の考え方は、もう一方の検討委員会でこれから詳細に検討を進めますが、第1にはやはりこの松崎吉田線からアクセス道路として分岐させて、ある意味最短距離を至るような、既存の道路を拡幅しながら最短距離で接続するようなことが基本になって、そのほかいろんな検討が、ほかのルートももちろん考えられると思いますので。

○福川裕一（委員長）

それはちょっと置きながら考えましょう。

あとですね、自転車はどこをよく走っているのですか大谷委員。

- 大谷芳末（委員）
自転車は、主に走っているのは現在の県道ですね。
- 黒須良次（委員）
それから、サイクリングロード的な堤防の上、八千代市側のここがメインです。印西市側は残念ながらサイクリングロード的に整備されていません。堤防の上ですけれども。
- 大谷芳末（委員）
ここは非常に整備されています。でも、現実には走っている人はこっち、大半はこっちなのです。ここはほとんど走っていない。
- 福川裕一（委員長）
子供連れはこちらになるのかな。ここはね。
- 加藤文男（副委員長）
整備されていても走っていないと。
- 大谷芳末（委員）
走っていないです。もう集団で10人くらいのチームが、始終ここを走っています。
- 福川裕一（委員長）
わかりました。
それでは。はい。
- 川砂智行（事務局）
では、ちょっと順番に置いていきます。まず、地域振興策なのですけれども、その前に追加資料を出します。
- 小野明（委員）
これは確定なのですか。
- 大谷芳末（委員）
決定です。
- 小野明（委員）
これは決定ですか。では、これは心配ない。
- 福川裕一（委員長）
これをつくらないと。
- 大谷芳末（委員）
進捗だけの話。毎年の予算。
- 小野明（委員）
ごみ収集車は。
- 福川裕一（委員長）
決まっていない。
- 大谷芳末（委員）
もう去年ボーリングかなりやりましたから。
- 小野明（委員）
よくごみ収集車反対していた住民は大丈夫なんですね。
- 福川裕一（委員長）
問題はどこを歩いていけばですね。
- 黒須良次（委員）
栄町とか日医大方面はこっち使ったほうがスムーズに行くかもしれないですね。
- 小野明（委員）
ごみ収集車ですか。まず、栄町だから。
- 川砂智行（事務局）
今皆さんのお手元に置いたもの、ちょっと追加で参考までにお配りしたのですが、そ

の建設候補地周辺の高台のあたりで、台地で展開するものを分類別というか、性質別に分けたものです。この分類別にこれからプレートのように置いていきますが、まず最初、1番といたしましては、大きな収益に直接寄与できる施設として、中核機能を持っているものとして、やはり道の駅とサンセットスパアンドリゾート、それともぎ取り農園直売所が直接的なものとして考えられると思います。この中でも特に重要となると思われるのが道の駅だと思うのですけれども、先ほどからの議論のとおり、単なる道の駅では機能が不足すると思います。

これから複合展開する策のプレートも置いていきますが、今後参考にしたい先進地として、やはり加藤副委員長がプロデュースされた道の駅とみうらの枇杷倶楽部が挙げられると思います。こちらは、2000年に全国グランプリの最優秀賞を受賞いたしております。現在全国で1,000カ所以上もある道の駅のうち6カ所しかないモデル施設の一つとして選定をされております。その枇杷倶楽部さんの大きな取り組みといたしましては、特産品であるビワの加工ですとかオリジナル品、これを何と50種類も開発されているということです。あとは、地域の観光資源をパッケージ化して、東京などの観光会社へ販売したりですとか、また地域の伝統文化の継承の場としても活用をされているそうです。

続きまして、道の駅と一体的に屋内スペースとして展開するものとして、全国公募による外食店、ベンチャー企業の事務所、小規模な多目的店舗、環境NPOの事務所、多目的研究室、地域住民サロン、商品開発の生産施設などがあります。この中で特に全国公募による外食店なのですが、これまでの委員会でもご報告しているとおり、レジャー白書で統計的にまとめられておりましたが、長期間にわたりこういった外食というのは余暇の上位に君臨するジャンルでございますので、これは力を入れていければというふうに考えております。

あと、環境NPOの事務所につきましては、この後ご説明する里地里山の活用の関係で、ご協力いただく環境NPOなどの団体の本部ですとか倉庫としての機能を持たせることも視野に入れております。

あと、商品開発については、食品関係だけに限りませんで、発電した電力を活用するドライフラワーづくりなど、さまざまなプランが考えられると思いますので、具体的には今後いろいろとアイデアを出していただければと思っております。

その次に、同じく屋内スペースなのですが、こちら今度保管スペースということで、サイクル駐輪場、レンタルサイクル、アウトドア用具の倉庫、カヌー類置き場などを挙げております。

そのほか一体機能としましては、学習ですとか芸術文化のスペースとしまして、ギャラリー、カルチャー教室、環境図書室、歴史の里構想などを挙げております。

続きまして、これから先は道の駅としての建物からは切り離される別の建物になるかと思いますが、実現可能性の高い夢の創出ということで、屋内カーリング場というものも挙げております。これは、今後近隣の大学とのタイアップが可能かどうか、大学側へのヒアリングなどを行いたいなというふうに考えております。

あとは地域通貨を付与ということで、付与する対象の取り組みとしては、EV充電ステーション、温水駐車場、食品残渣の地域循環構想などを挙げております。一例を挙げますと、今後普及が相当進むと思うのですが、電気自動車などのバッテリー搭載車なのですが、充電する際に道の駅運営者に支払う費用、例えば充電1回1,000円かかるすると、1,000円分の地域通貨を充電された方に付与するということです。そうしますと、実質の充電費用が無料となりますので、この地に赴く大きな動機が生まれるのではないかなというふうにございます。

続きまして、屋外の余暇スペースといたしまして、大規模な花畑迷路、ちびっ子ランドと水遊びの池、ドッグラン、イベント広場、サイクリング愛好家用の駐車場などを挙

げております。

基本的に、これらは家族連れの来場促進をにらんでおります。特に大規模な花畑につきましては、季節ごと、新聞などのメディアで取り上げられる機会がこれまでの例でも極めて多いことから、効果が大きいというふうに考えております。

また、屋外の関係ですが、アウトドアライフ関係のものです。バーベキュー場、キャンプ場、オートキャンプ場、燻製石窯、釜炊き、もみ殻炊飯、あとたき火ができるスペースということで、細かい部分ですが、こういったこの辺の公共施設にはない差別化というところを特ににらんでおりまして、こういったいろんなことができるよと。規制の方向ではなくて、緩和の方向だよというようなイメージの展開になればなというふうに思っております。

続きまして、農業体験スペースといたしまして、これはクラインガルデンということで、日帰り型と滞在型、市民農園です。

それと、台地のほうの今度端部におきましては、パラグライダー、パラモーターということを挙げております。

あとは、ソフト関係でございますが、大きなものとしましては、やはりプレミアム地域通貨です。こちらを広域展開していければなと思っておりますが、この地域振興策全体に網をかけるといった積極的な経済政策となります。例えば1,000円分の地域通貨を800円で販売すれば、販売される方は定価による収入が得られます。また、消費者は2割引で各種利用料ですとか商品を購入できると。なお、今申し上げた例の差額の200円は、排熱利用事業者などからの拠出を考えております。そのほか町内会のホームページですとか、いろいろなソフト的なバックアップを多面的に行えればなというふうに考えております。

また、管理業務などの受託といたしまして、受託のメニューといたしましては、施設の運営そのものを請け負っていただくということもあるでしょうし、また清掃受け付け、植栽管理など、地域の皆さんで無理なく請け負っていただけるものだけで進めることも可能なのではないかなというふうに考えております。

続きまして、排熱の高度利用ということで、排熱利用事業者の誘致と経営でございます。これも誘致につきましては、あらかじめ業種を定めるということではなくて、今後全国から広く募集することが最適ではないかなというふうに考えております。基本的に誘致の場合は、地域のリスクと収益が経営する場合よりも少なく、経営する場合には地域のリスクと収益が誘致する場合よりも大きいといった違いがあるのではないかなというふうに考えております。

また、排熱の高度利用としましては、そのほかにトランスヒートコンテナというものも挙げておりまして、こちらにつきましては先進の取り組みなので、具体的な情報収集を引き続き進めていきたいと思っております。

そのほか泉カントリー倶楽部への排熱供給がございます。これは、ゴルフをされにきた方のお風呂で、かなりの重油を使っている、熱を使っているということで、そこへの熱供給ということでございます。

また、給食センターも挙げております。これは、既存の給食センターの建て替え時期とのすり合わせが必要になりますので、長期的な検討が必要なメニューだというふうに考えております。この台地の上で、こうしたものを複合的に展開することで、大きな波及効果を得ることができるのかなというふうに思います。ひいては、この道の駅的なのか、この道の駅自体を目的として来ていただけるように、何かのついでではなくて、ここに来ることを目的にいただければなというふうなところまで育て上げられればいい形になるのかなというふうに思っております。

続きまして、今度は建設候補地で展開するものとしていたしまして、まず猛禽類の営巣場

と煙突の展望台ということで、これは煙突の高さを活かしたものでございます。それと、屋外クライミングということで、これは工場、施設の壁の大きさと高さを活かしたもので、それと防災拠点化構想ということで、これは先ほど加藤先生のほうからもご指摘、お話しございましたが、次期中間処理施設につきましては高度な処理システムをもっておりまして、大規模災害時であっても電気等が使えるというような施設でございます。あわせてまして、この地で展開するにあたりましては、道の駅にある食材ですとかサンセットスパにあるお風呂、滞在型のクライנגルデンが持つ宿泊機能なども活用することで、これまでにない防災拠点ネットワークが構築できるのかなというふうに考えております。

そのほか調整池の活用ということで、これはビオトープ的に整備するなどして、単なる水を溜めるところではなくて、活用を進めてみようというものでございます。

あと、建て替え用地の活用として、ふれあい動物公園、ダチョウ園と挙げているのですけれども、これは家族連れの来場促進の目玉の一つとして考えておりますが、先ほど事務局から報告があったように、建て替え用地を災害廃棄物のストックヤードとして位置づける可能性があるという中、施設整備基本計画側のほうで当面検討を進める運びとなりましたので、ふれあい動物園関係につきましては、場合によっては道の駅などの近接地などで展開というふうには、場所は移動して考える必要があるかと思っております。

続きまして、こちらの大きい広域のほうの事業展開でございますが、これは地域還元です。まず、集落で展開するものとしたしまして、地域還元としてエネルギー供給ということで、メタンガスの地域供給というものを挙げております。こちらにつきましては、今後施設整備基本計画側で処理方式を選定いたしますので、今後その審議状況を皆様にご報告をしたいと思っております。そのほか可搬式の蓄電池などを挙げております。

そのほか集落で展開するものとしたしましては、インフラ関係といたしまして、おみこし、皆さんお手元の資料でおみこしの修理から自主防災の支援まで10項目弱ぐらい記載してあると思うのですが、こういったものを展開すると。こちらについて、基本的には地域の不足しているインフラ整備でございまして、地域の方々のご要望に基づき進めるものと考えております。

そのほか場所が特定されているものとしたしまして、管理負担の大きい印西市道のつけかえというのが現場が特定されて、あとは雨水排水路の整備ということで吉田グラウンドの上、それと集落の関係では地域振興施設の無料化というものを挙げております。無料化の対象となるものはいろいろあると思っておりますけれども、主なものとしてはサンセットスパが挙げられると思っております。

続いて、最後ですが、里地里山で展開するもの、こういったものにつきましては、先ほどご説明したように基本的には環境団体のご協力を前提としております。まず、谷津田の活用ということで、田んぼの自然公園ですとかイチゴのあぜ、水路脇に木造里山トイレ、そういったものをやりつつ、魚関係で川魚などの養殖と小魚の釣り堀というものを建設候補地のちょっと近い位置の谷津田でできればなど。

それと、先ほどご意見がありました、名称は後で考えますが、贈答米のような取り組みです。こういった農作物の新たな販売方法につきましては、本当いろいろな方法ですとか取り組みがあると思っておりますので、今後も考えていければなと思っております。そのほか一口オーナー米ですとか10坪家庭田園ということで、各種オーナー制、こういったものもいろいろと展開できるのかなと。

それと、ちょうど高台の候補地の一番西側のあたりに崖があるのですけれども、その崖の崩落対策も兼ねるような形での棚田的な整備、これは田に限らず、畑にしたり、花畑にしたり、いろんなことが考えられると思っておりますが、仮にどのみち崩落対策をするのであれば、ただそれだけをやるとはではなくて、プラスアルファすることがいいのではな

いのかなというところが趣旨です。

次に、森の活用ということで、市民の森構想、森の畑構想、薪を生産したり、鳥類の巣箱をつくったり、林間のアスレチック、これは建設候補地を。

○福川裕一（委員長）

この森になるのかな。

○川砂智行（事務局）

そうですね。そちらのほうになります。建設候補地の西側の一団の森がまず第一には考えられるのですが、ただその周りを囲む形でほかにも森がありますので、展開できる現場というものはいろいろ場合によってはあるのかなというふうに思っております。

それと、最後、散策動線ということで、里山ジョギングロードですとか散策路コース、サイクリングコースなどの設定です。ここに建設候補地がありまして、こちらに大きな谷津田があって、建設候補地の北側にも小さな谷津田があるのですが、ちょうどこちらの大きな谷津田と建設候補地を結ぶ道路として、ゴルフ場に挟まれた細長い、山があるのですが、この真ん中、実は公道があるのです。これうまく使えば非常にいいかなと。

私と中野で一度春先に歩いたのですが、現状では途中までしか道がありませんで、あとは山道なのですけれども、ただ公図上きちんと道がありますので。

○加藤文男（副委員長）

赤道。

○川砂智行（事務局）

はい。もともと建設省が持っていた道路だと思うのですが、今印西市のほうに移管をされている道路になります。

雑多な説明で申しわけないです。あとは、自由にディスカッションしていただければ。

○福川裕一（委員長）

これを全部並べると、こうなったわけですね。これ整理しなければいけませんね。

○小野明（委員）

これ吉田地区の人が見たら、すばらしいと、生まれ変わるなど。夢物語になってしまう。

○福川裕一（委員長）

ちょっと整理しなければなと思うのですが。

○加藤文男（副委員長）

基本的なことを伺いますけれども、こちら方向が北ですか。

○川砂智行（事務局）

向かってこちらが北になります。

○小野明（委員）

星野リゾートと組んで、民活の一大リゾート自然公園、リゾート開発だったらいいかもしれないですね。相当行政もバックアップしてやらないと。

○福川裕一（委員長）

いや、結果書いてありますので、別に1個1個見れば。

○川砂智行（事務局）

そうなのです。

○小野明（委員）

でも、複合施設として初めて道の駅が来ているわけでしょう。

○川砂智行（事務局）

と考えております。

○福川裕一（委員長）

なぜ場所が違うのですか。施設としては基本的セットでしょう。

○川砂智行（事務局）

施設としてはセットで考えられますけれども、大きな効果を上げる核となるようなものとして。

○福川裕一（委員長）

あと、ここに今場所が置かれたのは何か理由があって置かれたのですか。適当にどこでもいいけれども、ここに置いたのですか。

○川砂智行（事務局）

まず、位置関係につきましては、やっぱりサンセットスパアンドリゾートにつきましては、そういった見晴らしというものを視野に入れたものになろうかと思っております。

○福川裕一（委員長）

大谷委員の説明だと、下と上にあるのではなかったですか。

○大谷芳末（委員）

この辺ですね。

○福川裕一（委員長）

下と上にあって、間にケーブルカーがあるのではなかったでしたっけ。

○大谷芳末（委員）

そういう案もあって、下の土地をお求めになるならば、そういう案も。でも、お金がかかり過ぎるから、上でもいいかなと。

○福川裕一（委員長）

その場合であっても、どうやって道をつけることになるのですか。ここは分岐して、こっちに来るわけですか。何かアイデアありますか。

○川砂智行（事務局）

また施設整備基本計画のほうでの検討になるのですけれども、アクセス道路として、まだ具体的にはこれからですけれども、ここが新しく幹線的な印西市道になりますので、先ほど黒須委員からお話があったように、非常に重要な役割を持つかと思えます、ニュータウン方面のアクセスとして。この道路から、例えばここに現道の赤道があります。これを拡幅する、ここから分岐させて、新たなアクセス道路をここから整備をしていって、例えばこう上がっていくとか、高低差がありますので、こうやって上がっていくとか、その辺の検討を、これからもう一方の検討委員会で進めると。

○福川裕一（委員長）

これに行くには遠い道ですね。

○川砂智行（事務局）

ただ、どのみち来場者のほとんどが車だと思っておりますので、こういった幹線道路からの看板を見て、では行ってみようかということであるのではなくて、ここだろうが、ここだろうが、別に変わらないのかなと。

○福川裕一（委員長）

別に車に乗っている人はそんなものですから。

○加藤文男（副委員長）

苦しいでしょうね。

○福川裕一（委員長）

苦しいね。やっぱり見たところ。

○川砂智行（事務局）

もちろんここでの検討というものも考えられると思っておりますので、展開する場所がどこがいいのかというのも、これからはちょっと審議していければなと思っております。ここが太陽光パネル。

○黒須良次（委員）

全部をとると、交差点は多分そこら辺の。ここからこう上がって、このライン、非常になだらかに上がってきている。

○川砂智行（事務局）

今県道関係の資料をお渡しします。

○福川裕一（委員長）

これ入れますよね。これはゴルフ場専用の道なのですか。

○中野竜一（事務局）

こちらは第2回会議でも提出しておりますが、こちらが県道の位置となっております。

○福川裕一（委員長）

だいたい行き着くところはゴルフ場しかないですけども。

○小野明（委員）

これ道路が重要な要素になりますよね。これは、道路ができなかつたり、ほかになつてしまつたら。

○福川裕一（委員長）

道路はできる。大丈夫、それよりどこを通すかが重要。

○小野明（委員）

そこだと思えます。

○福川裕一（委員長）

ゴルフ場は、さすがにいいアプローチですね。

○黒須良次（委員）

勾配も非常に適正な勾配で。

○福川裕一（委員長）

この土地はゴルフ場が持っているのですか。

○川砂智行（事務局）

そこは印西市道です。

○福川裕一（委員長）

これは両方、貝塚行く向きはゴルフ場が多いと。

○川砂智行（事務局）

すいません。そこまではちょっと確認できていません。

○福川裕一（委員長）

いや、これ打ち合わせのときにもちょっと申し上げたのですけれども、今ばらばらにエレメントを並べていただいたのだけれども、もちろん皆さん持っているような、全体として一つのある種公園のようなものですが、我々の業界では昔からフランスで有名になったエコミュージアム、エコムゼという発音になるのですけれども、そういうのがあって、過去もそういうのがあるのですけれども、地域全体を丸ごとミュージアムのように整備していくという考え方で、その中に基幹的な入り口になる施設がある。それがあって、エコムゼと書いてあるから、別に自然環境だけではなくて、社会的な、歴史的なものをテーマにしても、何にしてもいいのですけれども、それを我々は日本語に直すときに、エコムゼではあれなので、地域丸ごと博物館と言っているのですけれども、多分ここ全体を、集落含めてそうするのではないかと思うのです。

だから、集落のいろんな道路の整備とか、そういう話の中で要するに位置づけていって、何か集落、生活環境のためだけの道路の整備というよりは、全体を一つのエコムゼに、地域丸ごと博物館にしていくための措置としてそれを全部位置づけていって、その基幹施設がこれであるというふうに整理すると、ちょっと今ばらばらになっているものが一つまとまるのではないかと思うので、それに上手な地域丸ごと里山ミュージアムと

か、そういうふうにしたたり、さっきの複合何とかにしたり、何か上手にネーミングして、ここでイメージを、ブランド化を進めていくといいのではないかと思いますけれども。

皆さんがいろいろ出した要素が点々と上がっているので、何とか一体にしないといけないと思いますが。

○小野明（委員）

今、国が進めている地方創生、今地方版つくらなければいけないではないですか。ここを例えば特区に、例えば特区的なものに指定して、それで行政、税制とかいろんなことを優遇措置として、全体を要するに地方創生を、吉田区をモデルというか、新設して、それを位置づけの網をかけた上でやると、吉田区として生きてくる。

○福川裕一（委員長）

特区というのは、今の制度をクリアするための措置ですが、特にその必要はないようです。特にね。

○小野明（委員）

特になくてもいいのですけれども、要はどうせ地方創生の案を出さなければだめではないですか、印西市も。

○福川裕一（委員長）

都市近郊の、そうですね、それはぴったりですね。

○小野明（委員）

そういう中でこれやると、生きてくると思うのですね。

○福川裕一（委員長）

これちょっと今この案ですと、こっちが何かおっしゃっているし、上手にくっつけないといけないなど。

○渡邊忠明（委員）

もう一度松崎との境を教えてください。

○大谷芳末（委員）

松崎との境は、ちょうどこの川ですね。

○小野明（委員）

松崎区は、まだ委員決まっていなかったわけですよ。松崎区は余り賛成していないんですか。ここ重要ですよ。幹線道路私も素朴に疑問だったのだけれども、何だかそれで大丈夫だったということですか道路は。

○渡邊忠明（委員）

ただ、具体的なものを張りつける場所ではないということは確かみたいですね。

○小野明（委員）

それならいいのですけれども、ここは重要な、さっき道路とおっしゃったので、こういうのを。松崎区をまたいでしまうと、大丈夫かなと。

○渡邊忠明（委員）

私、ですから先ほど境のところと聞いたのです。

○小野明（委員）

そうですね。今、福川委員長がおっしゃったのは、素朴な疑問。

○大谷芳末（委員）

風のうわさでは、大分軟化してきているという話も流れてきますけれども。一応公式には松崎は反対という立場をいまだにとっています。

○小野明（委員）

そうですね。

いや、それがわかっていればいいのですけれども。いって、おかしいのですけれども。不思議に思っていたものですから。ちょっと心配したのは、ここは道路できていま

すよ。

○大谷芳末（委員）

この道路は、3年前から決定した事項ですから。

○小野明（委員）

車通れないと、清掃車も。

○渡邊忠明（委員）

もちろん道の駅で、地元の人を雇用して。

もぎ取り農園直売所というのが特出しで書いてあるのですが。

○福川裕一（委員長）

それでは、ちょっとここで5分ばかり休憩しましょうか。

〔休憩〕

○福川裕一（委員長）

おそろいになったので再開して、では数十分少し討議していきましょうか。

はい、どうぞ。

○渡邊忠明（委員）

確認ですけれども、もぎ取り農園直売所というわざわざ書いてあるのですけれども、地元の人たちのつくった産品は、道の駅で当然直売させていただけるわけですね。

○川砂智行（事務局）

はい、そういうことです。併用です。

○渡邊忠明（委員）

環境学習だとか、食農教育というのは、こういうものを全部含めて、先生のおっしゃった地域丸ごと博物館と。

○川砂智行（事務局）

おっしゃるとおりだと思います。

○福川裕一（委員長）

ですから、道の駅には、ちょっとそういう展示施設とか、何かあるのですよね。そういうものをこの地域の動植物、それは普通のものかもしれないですけれども、ドジョウとか。だけれども、そういうもので大谷委員の想いが。

○渡邊忠明（委員）

いや、事務局がおつくりになった資料、全部そういうソフトの環境学習だとか、そういうソフト全部採算性ゼロとなっているのですけれども、人が来て、汗かいて、お風呂入って、飯食って、あるいは夕飯のおかずを、新鮮な野菜を買っていくと。要するに人に来てほしいための環境学習、食農教育を考えていますので。

○福川裕一（委員長）

同時にそれで面倒くさい草刈りとか、普請とか、そういうものもできる限りそういう友の会で実現していくと。森もきっと下草大変ですよ。

○渡邊忠明（委員）

しろい環境塾というのは、まさに下草刈りしたり、間伐したり、堆肥を谷津田に引き込んで、田植えして収穫までと、そういうNPO法人が非常に活発ですから。

○福川裕一（委員長）

ですから、やっぱり直接的な収益と、それからそういう付加価値を与えるものと一緒にしてしまうとまずいですね。ただお風呂があっても人が来ないと、きちんとそういう環境学習、里山の場合であるということ人で来るという構造ですから。

○小野明（委員）

マーケティング戦略も大変ですね。そういうことも考えないといけないですね。吉田株式会社で、マーケティング会社を子会社でつくって、社員は誰がいるかですね。お年

寄りだけでは。

○加藤文男（副委員長）

KJ法みたいにくくっていったらどうですか。

○川砂智行（事務局）

そうですね。

○加藤文男（副委員長）

そうじゃないと、ソフトウェアとソフトの話と、それから小さな附帯施設の話と、大きな施設の話と、みんなまじってしまっているの、KJ法で囲って行って、例えばお風呂があって、道の駅直売所があるとしたら、その連携がとれるよとか、そうするとその重なったところで、こういうものがつくよとやっておいたほうが、地元の説明会心配しているのですけれども、これがどれだけ張りつけますかと言われると、皆さん困ってしまいますよね。

○小野明（委員）

これ見ていたら、地元大変なことになってしまうと私思ったのですけれども。

○福川裕一（委員長）

地元の方が挙げた策から一遍並べてみて、少し整理する必要があるなと思います。

○小野明（委員）

まだ地元の直接声は聞いていないわけですよ。

○渡邊忠明（委員）

ですけれども、もう何回か。

○福川裕一（委員長）

地元から挙がってきているのですよ。

○小野明（委員）

そうですけれども。ギャップがないかなと心配しているのです。大谷委員はもうプロだしいいのですけれども、ほかの吉田区の人たちがついてこれるかどうかという、そこだけです。

○福川裕一（委員長）

例えば排熱事業者を呼んで、植物工場をやっていただくかどうかわかりませんが、その場合、吉田区としてはやはり自分でやるものはないわけですか。

○大谷芳末（委員）

その辺がなかなか。

○福川裕一（委員長）

初期投資がね。

○大谷芳末（委員）

難しくて。これだけアイデアがいっぱい出ているのですけれども、これだけ人材がいるかというのが半分心配で、ですからほかの3市町に広げて事業やりませんか。例えば温室つくって先端農業やるにしても、3市町の対象の人で有能な方、意欲のある方を選んで構わないわけです。吉田だけではなくてね。

○小野明（委員）

こういう事業って、やはりリーダーシップをとってくれる人、熱意のある人というか、そういう人がいないとなかなか進まないでしょう、最初のときは特に。そういう意味で、この前行政がどれだけバックアップするよなというのが最後の話になってくるので、吉田区、この前の話のコンセプトで、吉田区の皆さんが主体的にやるというのが一つのコンセプトになっていました。逆に負担になってしまはいけません。そこが私ちょっと気になったのですけれども、住民説明会に出したときに、そんなのだったら、割引券もらえばいいやという話で、上下水やってくれと、みこし直してくれと。アイデ

アはすごくいいのですが。

○福川裕一（委員長）

サンセットアンドスパリゾートの一番望ましい場所のお考えはどこなのですか。

○大谷芳末（委員）

この辺のですよね。ちょうどこちらと同じ南北関係ですけれども、ここに小山があるので、この辺がやはり西のほうが見える。

○福川裕一（委員長）

そうすると、ここからアクセスしてきたときに、丘の上に何か、絶対行ってみたいくなるようなものがあると。その後ろに煙突がそびえていると。こういう感じですか。

○黒須良次（委員）

見晴らしのよいのはこっちでしょうか。

○福川裕一（委員長）

こっちの方角ですかね。

○大谷芳末（委員）

そこも大事なのですね。

○小野明（委員）

これ箱物行政になってしまうのだけれども、このサンセットスパアンドリゾートをつくれますねと。建築費をかけた後、運営コストも、ランニングコストもかかってきますよね。さっき収益をきちんと計算していただいていたけれども、これはランニングコスト、これからどんどん老朽化していけば、そういうこともかかっていくわけですけれども、そういうスパと、それをやって、お客さん来ますか。入りますか。来ますか。

実は、ほかのはいいのです。例えばグライダーや他の施設など。

○福川裕一（委員長）

これが目玉ですから。

○大谷芳末（委員）

まだ事業スキームのところまで触れませんが、それは皆さんも心配しているところだと思うのですが、官がやろうが、民がやろうが、やはり集客で収益を上げて、維持管理、保守、そういうものもちゃんと経営しないとイケない。

○小野明（委員）

そういうことですよね。人材も必要ですしね、経営もやらなくてははいけないし。

○大谷芳末（委員）

あるときは模様替えするとか、古くなる場合。それは運営の中で、当然どういう会社がやるにしろ、そういう積み立てをされていて、ある時期には修復というのは必要だと思います。

○渡邊忠明（委員）

そうですね。しかし、今あるスーパー銭湯、白井の湯だとか、真名井の湯に比べれば、立地条件はいいですね。

○福川裕一（委員長）

よそに負けてはいませんね。

○大谷芳末（委員）

そこが最大の特徴だと思うのです。おそらくおうちのお風呂ではなくて、たまにはそういうところへ行こうと求められる方は、大概、非日常を求めて行かれるのですから、そういう意味では解放感、見晴らしがいいと。

○渡邊忠明（委員）

少なくとも白井の工業団地の一角にある白井の湯よりはこちらのほうが魅力的です。

○黒須良次（委員）

周辺の温泉スパ系の施設で大きいところというと、結局印西市の中央駅付近の真名井の湯ですよね。それから、成田にあるやまとの湯、柏に満天の湯という湖畔に道の駅とセットになっていますね。これらは、たくさん集客があります。それから、それぞれみんな温泉を掘っていますね。全部掘っています。まだ小さいものをたくさん入れると、先ほどの白井でも工業団地の中にあたりとか、八千代が出たりとか、かなりあるところなのですけれども、この場所は、環境を活かして、要するにのんびりできるという部分はほかにはないところがあるのではないかと思います。

○渡邊忠明（委員）

ここの熱を使うわけですよね。

○福川裕一（委員長）

排熱を使うから、温泉は掘らないですか。

温泉ではないのですよね。温泉にしますか。掘れば出るかもしれないですよ。余りこだわらなくてもいいですか。

○黒須良次（委員）

掘ったほうが、やはり泉源ですとか、いろいろバリエーションをつけて、いろんなお湯をつくると思うのですけれども、やはり持っていたほうが集客的にはいいのではと思います。

○福川裕一（委員長）

お風呂は、割にマーケティングが簡単で、専門の方に頼むと、さっと答えてきますので、それは早くやってみたほうがいいですね。

○加藤文男（副委員長）

大手のリース会社ですけれども、そこがシステムを持っていて、採算合うかどうかわかります。

○福川裕一（委員長）

決めているのは、結局周りに何があるかでやっているだけですから。

○加藤文男（副委員長）

ただ、この場合難しいのは、採算だけで考えていくのではなくて、地域振興とか、この施設を立地させる意味だとか、いろいろな目安ですけれどもやっていくのでしょうか。後々のことを心配しなければいけないのですけれども。

○小野明（委員）

道の駅として生きていくのは、複合施設として生きていくとなれば、一遍にはできないわけですから、これが機能するとしたら、まず最小限、最終的にはこういった形になるのだけれども、まずは第一段階でこういう形でやっていくという、そういう多少優先順位をつけて住民の方に説明しないと、一遍にぼんとできるわけではないですから。例えば今の話でいくと、まずスパと、それがキーポイントになればなと思います。

○加藤文男（副委員長）

道の駅と温浴施設というのが、どうも相性がいいようですね。全国的にはかなり集客していますね。ただ、この道の駅の道の問題で客層も変わったりするでしょうから、一概に言えませんけれども、相性はいいようですね。

○福川裕一（委員長）

ゴルフ場でプレーをしている方が来てくれないですかね。

○加藤文男（副委員長）

ゴルファーは、汗かいて、お風呂に入って、着がえて帰りたいので。

○黒須良次（委員）

サービスで休憩してもらおうというのはどうですか。

○渡邊忠明（委員）

とにかく加藤副委員長が前回おっしゃったように、エコノミーが先よということですから、もう何か、ただ農民の方は今日のレポート見たら非常に少ないので、ちょっと驚いてしまったのですけれども。

○福川裕一（委員長）

農業の人。

○渡邊忠明（委員）

はい。

○福川裕一（委員長）

農業やっている人は少ないですね。

○大谷芳末（委員）

だから、10年たって、果たしてあの美田が残っているかとても心配しています。だから、保全するならばおそらく時期は今なのでしょうけれども、具体的にどうやって保全するかというのは、なかなか難しいところがありますよね。こちら側の谷津田は、ほぼ3分の1は荒れ地になると思う。ここが残っているのは、もう極端な話、奇跡だと思っているのです。

○渡邊忠明（委員）

ですから、早いこと印西市にはいろんな優良企業が研究所持っているではないですか。やっぱりそういう人たちの汗を流す場として提携してほしい。早目に。

○福川裕一（委員長）

教室で研修ばかりしているのではなくて、こういった場所に来て、耕そうとって連れ出すほうがいいですね。

○加藤文男（副委員長）

ちょっと話前後してしまうのですけれども、先ほど大谷委員からスコーラといたしましたか、学校。学校について、ここの中に含めるということは、この委員会として決めてしまっているのではないですか。

○福川裕一（委員長）

いいですね。

学校の意味は、ただ農業だけというよりは、環境学習ですね。

○大谷芳末（委員）

おっしゃられたように、道の駅というのは、私の理解も道の駅的な施設で振興しようというのが、そういう理解ですので、単純なよくある道の駅だけで考えると、吉田も1割ぐらいの専業農家さんしかしないと。周辺の集落も皆さん農業問題で困っているという中で、普通の道の駅だったら、僕らがいいと思ってつくったけれども、運営するのは将来の人ですから、将来の人が経営不振にあえいで、そのうち閉鎖みたいなのが頭をふとよぎるわけです。だから、普通の道の駅ではだめなのです。何か付加価値をつけて、話題性がないと。

○加藤文男（副委員長）

志の高い道の駅にしましょう。

○福川裕一（委員長）

もうちょっと道の駅間でネットワークはやらないのですか。

○加藤文男（副委員長）

国交省になるんですね。

○福川裕一（委員長）

国交省ですか。

○加藤文男（副委員長）

国交省にはよく言うのですけれども、国交省の道路局が管理しています。道路附帯施設ですから。でも、国交省の方にずけずけとってしまうのですけれども、仮に道の駅を経済産業省が管理したら変わっていると思いますね。

○福川裕一（委員長）

しかし何をやるかについては、もう少し自由にしていいいいのでしょうか。

○加藤文男（副委員長）

いいのですけれども、ただ先生言われたようにすれば、ここで商品開発したリスクが軽減されるのです。連携が上がれば。だから、10月にそういう会議があるというので、また一言、一言言って来ようかと思えますけれども。

○大谷芳末（委員）

場所によっては、本当におばあちゃんたちがちょっとしたものを持ち寄って売ってお小遣い稼げるというのもオーケーですか。

○加藤文男（副委員長）

オーケーですね。ですから、道の駅というシャッポをかぶっているだけなのです。道の駅という帽子をかぶっているだけで、あとほかの実態は、標準的な道の駅というのはもうないし、いろんな個性が分かれているので、だからこれはこれですごく楽しみな道の駅になって、先ほども学校という考え方はすごくいいなと思ったし、ここの中にスコーラという概念をここにもう委員会として入れましょうよという結論を出していったほうがまた束ねやすい。ですから、学校って、教室つくろうというわけではないでしょうから、機能ですよ。機能性なので、そういうふうにとまとめていくと、どんどんまとめやすいような気がします。

○渡邊忠明（委員）

先生のおっしゃった地域博物館の核と。

○福川裕一（委員長）

全体でいいですよ。地域博物館と言わずに丸ごと博物館とか。吉田スコーラとかいって、少しはてなと思ってよく見たら、丸ごと博物館で、そういうものでもいいと思えます。

○加藤文男（副委員長）

丸ごと博物館というのは、地域振興の面から少し言いますと、分散配置されている事業とか施設とか、それを統合して動かしていくための仕組みと考えるといいと思うのですが、プラスそこでエコムゼ、英語にするとエコミュージアム、日本語にすると地域丸ごと博物館とついでしてしまうのですけれども、建物になってしまうのです。だから、その中で、日本語にしてしまうと館になってしまっておかしいのですけれども、例えばお祭りだって、有形のもの、無形のもの、それを束ねていくための機能がここにまとまるという理解だと思えるのです。ですから、その中に具体的な名前が入ってしまうと余計いけないのですけれども、ここに学校というのがあると、すごく束ねていきやすいなという気がしますしね。

○福川裕一（委員長）

吉田スコーラの、吉田何とかスコーラといったほうがいいですよ。ちょっとそれだけでは。

○加藤文男（副委員長）

サンセットスコーラとか。

○福川裕一（委員長）

多分、ここは環境学習と農業と、やはりせつかくの清掃工場だから、そちらのリサイクル系の。

○渡邊忠明（委員）

それはもう環境学習に包含されて。

○福川裕一（委員長）

もう少し大きい学校という感じでまとめると、リサイクル工房があって、そうやって古い椅子からその土壌の模型をつくっているとか、そういう感じをつくると。

○小野明（委員）

印西市の今後のビジョンの中に、こういうのは位置づけというのにはできるのですか。位置づけないと。

○福川裕一（委員長）

位置づけざるを得ない。

○小野明（委員）

そうそう。そういう前提で話をすれば、住民にしてもね、そうかと。

○福川裕一（委員長）

実は、私は中心市街地、商店街の再開発とか、そういうのをやっているのですけれども、高松丸亀町には、私が社長をやっている、まちのシュレー963というのがありまして、シュレーはドイツ語のスクールですね。スコラとかシュレーとか、いいかもしれません。何かなと思って、来ると思います。そこは、お店なのですけれども、讃岐のもの3分の1、四国のもの3分の1、世界から良いもの3分の1を集めたライフスタイルショップと我々は言っているもので、その中に入るととても気持ちよくて、何時間もお買い物をしているという場所です。

○小野明（委員）

神崎にある、さっき申し上げましたけれども、道の駅、あれ人がたくさん来ていますけれども、やっぱり行くとわくわく感がありますよね。つまり地元でとれる発酵のまちということで売っているのもあるけれども、さっきも申し上げましたけれども、神崎にわざわざ行かなければ買えないものもあそこに行けば買えるとか、だから先生おっしゃったとおり、地方で、バスで行かなくてもここで手に入るようなちょっとしたものというのはいいと思う。そういうのもいいかもしれないですね。これ地方創生の中で位置づけられるのですか、このアイデアの中で。

○福川裕一（委員長）

何か補助金があればですけれども。

○小野明（委員）

なぜかという、そういうところに位置づけることによって、国とか、そういうところの補助金を持ってくれば、関係する市町内の負担も減りますよね。どっちみちこれ行政のバックアップないとできないぞと。

○加藤文男（副委員長）

ただ、地方創生というのがあと10年もつかどうか分からない。

○小野明（委員）

10年はもたないでしょう。

○福川裕一（委員長）

政権によって変わりますから。名前は変わっても、テーマは変わらないから。

○小野明（委員）

テーマは変わっても、その人口だと思うので。

○福川裕一（委員長）

創生ということはなくなるかもしれない。

○小野明（委員）

だから、これがきちっと位置づけを早くしておかないと、管理者が変わったりですと

か、いろんな周辺の状況が変わったときに、またせっかくのアイデアが振り出しに戻ったら残念かなということ。だから、早目にこういうのは網かけてしまったほうがいいのかなと。

もう一つ、さっきの排熱の事業者を誘致するという件があったのですけれども、これよく見たら、1日15トンか何かが処理する前提で何かあったのですけれども、私素人なので、どれだけそれが発電量になるかわからないのですけれども、これ。

○川砂智行（事務局）

今の15トンについては、いわゆる不燃ごみ、粗大ごみとしての処理量で、排熱の出る、燃やすごみとしての処理量の現状の想定は156トンです。156トンという施設規模で、1日燃やすごみ量というのはその範囲内ということになります。

○小野明（委員）

そうですか。要するにどれだけ発電量、つまり供給能力かどうかわかりませんが、どれだけ発電能力、発電量があるかわかりませんが、売電ですよ。事業者、今は熱供給事業者を有してあるのですけれども、例えばここで電気を売って、印西市にある例えば企業とか、そういうところに安く、今は原発が1個しか動いていないからこれ非常に電気代高いのですけれども、その収益というのを上げればまさに吉田株式会社になるけれども、どこかの発電業者が組む必要あるかもしれません、経営の安定にも結びつきますし、もちろん周りに電気を供給するというのもあるのでしょうかけれども、売電という考え方というのはどうなのですか。売電事業をやっていくということですね。

○福川裕一（委員長）

それは余力があればでしょうね。

○小野明（委員）

そういう意味では、どれだけ発電ができるのかによると思うのですけれども。売電収入。

○渡邊忠明（委員）

電気事業法は厳しいです。

○小野明（委員）

今度自由化になりますよね。

○渡邊忠明（委員）

自由化になっても、電気事業法の縛りが非常に厳しいので、有資格者を確保したり、いろいろありますが、やはり電気会社に売るとというのが一番儲かるのでしょうか。だから、熱ですよ。発電した後の熱をどう使うか。

○福川裕一（委員長）

熱で、やはり吉田特産の植物工場をやるしかないですね。

○小野明（委員）

今は、電気は供給しないのですか。今のごみ処理センターにはありますよね。

○福川裕一（委員長）

電気もやってもいいのだけれども、そこまで余裕があるのですか。

○小野明（委員）

いや、供給はしないのですか。

○川砂智行（事務局）

現状でございますか。

○小野明（委員）

現状。

○川砂智行（事務局）

今、電気は外部に供給していません。自己消費だけです。

ちなみに、エネルギーバランスに関しては、今度第5回会議のもう一方の検討委員会のほうで検討に着手しますので、そこの一定程度の結論を見てから議論を進めたほうがよろしいかと思えます。

○福川裕一（委員長）

大体わかっているのでしょうか。

○川砂智行（事務局）

いえ、全くわかっておりません。これからです。

○小野明（委員）

余剰電力の売電。

○福川裕一（委員長）

今お話しされているぐらいのことは大丈夫なのでしょう。

○川砂智行（事務局）

次第のその他の中でご説明しようと思っていたのですが、今置いてあるプレートの中の幾つかが、清掃工場からの電気供給及び排熱供給を前提としております。そういったものをリストアップした上で、近いうちにもう一方の検討委員会のほうに情報提供して、こういったものが今アイデアとしてあるのだよというものを見ていただいた上で、エネルギーバランスを決めていただくかなというふうに思っています。

○小野明（委員）

もう一つは、このイメージ図の中で、③で余暇交流イベントというのがあるのですが、これに観光というワーディングを入れたらどうかなと思っているのですが、つまり訪日外国人も含めて、外国人も結構こういうところって好きだと思うのです。向こうのパンフレットに載ると、結構来るのです。特にアジアだとかヨーロッパに。だから、余暇交流イベントの中にも観光の要素があるわけなので、また実際にはもちろん外国人だけを念頭に置いているわけではないのですが、そういう意味では余暇交流イベントの中に観光というワーディングを、さっきの防災拠点化ではないですが、観光というのを一つ入れておくといいのではないかなと。観光関係の予算が使えるかどうか。

○福川裕一（委員長）

広域から客が来るのが観光というので。

○小野明（委員）

ワーディングで出しておいたほうがいいのではないかなと。これからの流れで、国の政策もあったりしますし。

○福川裕一（委員長）

東京から一番近い里山。

○小野明（委員）

そのうち英語表示板もつけるとか、いろいろ出てくるのです。そうすると通訳とか、千葉大の学生さんがアルバイトで通訳やるとかね。

○大谷芳末（委員）

参考までになのですが、泉カントリーの社員と色々な意味でつき合っていて、話しますのです。ちらっとお話ししたときに、泉カントリーはおそらく95%はお客さんは東京なのです。ほとんど地元の人はいないのです。支配人の夢を語ってもらったのですが、できればお父さんだけが来るのではなくて、お母さん、子供も一緒に来て、お母さん、子供は近くで遊んでいて、お父さんはゴルフして一緒に帰ると、そんなことができればいいなというふうな話をされていました。

○小野明（委員）

それはいいでしょうね。

○黒須良次（委員）

ちょっと泉カントリーの話が出ましたので、これだけのスケールの、これだけ集積した集客施設というか、集客ゾーンができるということは、よほど交通アクセスの際に見たときのイメージ、到達イメージというのが、しっかり描けるアプローチ動線というのを考える必要があると思うのです。まず、先ほどからずっと見ているのですが、やはりこの県道263号と、それから市道との交差点になるところのあたりが、この地区に入ってくる基本的な入り口のポイントとして抑えるべきではないかなというのが一つ。お客さんの目線から見てですね。なぜかという、そこが一番認識しやすい。いろんな方向から来た人がですね。なおかつ、何かイベントがあったときの車の滞留、集中とかを処理しやすい。道路構造的に、そこに例えば右折専用レーンをつくれるとか、そういう工夫をやっぱり考えておかないといけないと思うのです。そうしますと、ここが交点だとしますと、ここからアプローチしてくると、この道が非常に理想的に私はできているのではないかと思うのですけれども、勾配からこういうふう、自転車でも来れるし、この導線をうまく活かして、これをもうちょっと立派に拡幅するなり、もっと整備するなりして、すばらしい地区という予感をさせる、この交差点の入り口から予感させるような、そういうシンボルロード的なものに仕立てていくことによって、ちょうどここがゴルフ場とのゾーンと、それから集落の真ん中に位置する農道というのですか。

○福川裕一（委員長）

農道ね。

○黒須良次（委員）

農道になる。こちら側は集落ディストリクトがあって、こちらがゴルフ場のディストリクトがあって、こちら側がこういう多様な先ほどの拠点的なゾーンがあるというように、ここもやはりシンボルチックに演出して、ここで交通整理していくという。

これだけの人が、場合によっては一時にたくさん集まる可能性のあるところであれば、まずはそこら辺の骨太い、どこをどういうふうにして人を呼び込んでいって、全部それはすばらしいところに行くのだというイメージを持たせるかという、そのアクセスのアプローチのプランニングというのが、よく加藤先生おっしゃるようにランドスケープ考えながら、記憶に残るといいますか、必ず記憶に残るような場所づくりのまず入り口の仕立てといふのが必要ではないかと。なおかつ、それが交通処理しやすい、景観だけではなくて、交通処理しやすく、短期大量集中に耐えられる、それから場内の利用、いろんな人がアクセスしやすいというような、その道のまずおへそになるようなところをまず押さえていくというのが動線計画で、必要な条件ではないかなという感じがします。

それからもう一点、清掃車の導入ということと場内サーキュレーション、要するにいかにか循環するか、やはりこれだけ広い南北方向、この台地の上でも500メートル、東西でも500メートルくらいありますから、いかにサーキュレーションさせて、それぞれのゾーンの特徴を活かした施設配置をしていくかと。だから、この台地の上で施設ゾーニング、空間利用のゾーニングをしていく。もう少しそれぞれのエリアの特徴というか、潜在的な性格というのもそれぞれあると思いますので、入り口に近いところから、施設に近いところ、真ん中のところ、そういうのも見ながらサーキュレーション、動線をどうやって、どういうふうにして回していって、それぞれのゾーンを使っていくかというような、そういう考え方をしっかりさせて、それとあえてもう一つは、市道への、先ほどこちらのほうから清掃車をアクセスしたらいいのではないかなという話がありましたけれども、一本ではなくて、そうやってサーキュレーションさせながら二重にアクセス出していけるような、そういう動線計画の基本というのを考えながらゾーニングをしていったら、ある程度、よりイメージがレイアウトしやすくなるでしょうし、それぞれのエリアを活

かせるプランニングになるのかなというふうに思います。

○福川裕一（委員長）

建築の世界に入ってしまったね。

あと、何となくいつも話が抜けているのはここになりますが、集落の環境改善と合わせて、何かこのプロジェクトに参加するというようなことを考えたいですね。

○小野明（委員）

先ほど申しあげましたこの振興策の中で、地元の人たちがどういうふうに絡んでいくのか、絡めていくのか、そこの部分というのが、雇用なのか、あるいは主体、つまり会社の社員としてやってもらうのか、あるいは違う、喫茶店もありましたけれども、そこをやっぱり説明しないと、それはいいけれども、私たちはどういうことをやるの、どういう立場になるのとなったら、質問出たときに。

ただ、事務局の説明の文書を見ると地域還元については基本的に当委員会で検討を進めるのではなく、組合との協議による。いわゆる一般的な地元対策事業だから基本的には、他の地域振興策の連携は想定されませんとなっていますね。ですから、地域関係は考えなくていいのですね。

○川砂智行（事務局）

それは、こういうふうに考えていますが、皆様どういうふうに受けとめいらっしゃいますかという。

○小野明（委員）

いや、行政が逃げたかなと思ったのですが。そうですか。

○川砂智行（事務局）

といいますのも、やはりこういったインフラ関係というのは、大谷委員を介して我々受けとめているところなのですが、地域の困っていることですよ、要は。それについては、ここでそれをやるやらないとか、どうしようということよりかは。

○福川裕一（委員長）

これは、地域丸ごと博物館ですとか、当然典型的な地域の集落として、美しい印西の集落の典型をきちんとつくるという必要があるわけですね。そういう意味で、インフラの整備も可能と。

○小野明（委員）

ただ、お金がかかるから、下水道はやらないよとか、いろいろ書いてあるでしょう。

○川砂智行（事務局）

下水道については、お金の問題もあるのですが、地域の方々が今現実的に大きな問題として直面していないであろうという。

○福川裕一（委員長）

必要性を感じていない。

○川砂智行（事務局）

ええ。やはり今浄化槽等々で対応されていらっしゃると思いますので、それよりかは。

○福川裕一（委員長）

いわゆる下水道つくるのがいいかどうか。

○大谷芳末（委員）

その場合、施設関係で工業団地を延伸して下水道を持ってくるというのは、一応決定事項ですよ。

○川砂智行（事務局）

はい、下水道施設本体側のほうで引き込むという前提でいるということは聞いております。

○大谷芳末（委員）

何が具体化するかわかりませんが、ここでは相当、こういう設備でやると排水が出てくるはずなので、集落の中まではいなくても、この台地で作られたものの排水というのは、やはりこれからつくるのであれば、下水のほうが望ましいと。

○福川裕一（委員長）

そうですね。水が出ますし。

○大谷芳末（委員）

新たに排水が出るのですよね。

○福川裕一（委員長）

この施設自体が随分排水出すのでしょうか。

○川砂智行（事務局）

排水出るシステムと、余り出ないシステムとあるのですが。あとは、大谷委員からご紹介あったように、清掃工場の周りで展開する施設、当然下水が発生しますので、それを処理するにあたってはどのみち清掃工場まで公共下水が来ているのであれば、そこに接続するという考え方が当然あり得るでしょうし、ただこの資料で今まで載っていた公共下水というのはそこから外れて、その集落のほうまで枝管を持っていくのかどうかと。果たしてそこまでやるのがどうなのかというところでご審議していただいているところだと思います。

○福川裕一（委員長）

というところで、大体きょうは夢をお聞きしました。

○川砂智行（事務局）

では、ちょっと5日の意見交換会に向けて、幾つか確認させていただいてよろしいでしょうか。

まず、既に皆様に前回お渡しして、今回もお渡しした地域振興策のアイデアなのですが、ここで幾つか黒く網かけしているところ、これが先ほどご説明したように、また先日メールでご連絡したとおり、いろいろな理由で廃案ということを考えているのですけれども、これに関して、ここを廃案した上で、番号を振り直して、実際に展開することを前提に検討を進めるものだけを残して資料をちょっとまとめ直したほうが見やすいのかなと思っているのですけれども、いかがでしょうか。

○福川裕一（委員長）

また復活することを含むという。むしろ残しておいて、むしろ全体を、見やすいところをこうやっていく組み合わせることがよくないですか。私もエレメントを延々といっていますからね。どうでしょう。

○川砂智行（事務局）

では、今現状廃案と考えているものも残しておきますか。

○大谷芳末（委員）

私個人としてもシンプルにしたほうがいいので。これだけ盛りだくさんなのですよ。

○川砂智行（事務局）

できれば落とさせていただいて、ほかに何かなかったのかというときに、実はこういうものがありましたと。

○小野明（委員）

十分だと思いますよ。

○川砂智行（事務局）

では、ハッチングしたところは落とさせていただいて、番号を繰り上げしたいと思います。

あと、現状のアイデア集は8個の分類別、いろいろスポーツ振興だとか産業振興とか、

8個の分類別にまとまっておりますが、それであると地元の皆様、理解がなかなか難しいと思いますので、展開する現場別に、まとめ直したほうがよりいいかなとも思うのですけれども。

○福川裕一（委員長）

現場ですか。

○川砂智行（事務局）

はい。今展開する現場として、高台があるよ、集落があるよと、里地里山があるよと、今。4つに分けているのですけれども。機能ごとにしますか。

○福川裕一（委員長）

何かやっぱり全体構想のようなもので説明するのがいいのではないですか。まず、フィールドミュージアムですとか。

○渡邊忠明（委員）

これの上に、先ほど加藤副委員長がおっしゃったような柱立てをしてぶら下げていくというのは。

○福川裕一（委員長）

つまり重要なエレメントと、どっちでもいいというか、小さなエレメントがある、ごちゃごちゃになって数が多くなっているの、重要な柱は本数少ないのではないですか。

○川砂智行（事務局）

重要な柱は2本くらいしかないです。

○加藤文男（副委員長）

ちょっと言いますと、先生、言われているこの計画そのものが道の駅だとか、スパに分けられていますね。それをもう少し大きくくくってしまう概念をかぶせてしましましょうという、それはそれでエコミュージアムとか、そういう丸ごと博物館でもいいのですけれども、そういうものをかぶせた上でやっていったほうがいいと感ずるのです。そうすると、こっちの部分、一度集落にしたときに、考え方がある、発想が生まれてくる可能性があると思う。

○川砂智行（事務局）

ですから地元の方は、何となくですけれども、どこで何をやるのというのがまず最初興味を持つのかなと。それは地権者さんがいることもにらんでいますけれども、やっぱり里地里山でやるもの、高台でやるもの、集落でやるものというまず3つに分類して、その上で事業を説明しないと理解が難しいのではないかなと思うのですけれども、いかがですか。ほとんど基礎情報なしで聞かれる方もいらっしゃるのです。

○加藤文男（副委員長）

基本計画と集落ぐらいに分けるぐらいで、上か下かの問題は今やらないほうがいいのかもわからないですね。当然フローなんか高いほうがいいに決まっているのですけれども。

○川砂智行（事務局）

現状機能別にまとめたものが、このイメージ図のほうになるのですが、取り組みの主体や道の駅として現状5つの機能がありますよと。それに、先ほどご提案いただいた6個目の防災拠点という機能も含めて。

○小野明（委員）

観光は入らないのですね、③。

○川砂智行（事務局）

すいません。入ります。

○福川裕一（委員長）

こういうのは1個ですね。これも1個ですよ。

○川砂智行（事務局）

はい。これはアイデア抽出において、いろんなご意見が出やすいように、なるべく細かく細別化したものなので。

○福川裕一（委員長）

ちょっとまとめましょう。

○川砂智行（事務局）

はい。まとめるに当たって、先ほどの大きな志を持った中でのスコーラという学校機能、その中でみんな受け皿としてまとまるのではないかというようなご意見もあったと思うのですが、そういった形で集約化していくと。集約化するに当たって、ただ現場がちょっと違っていると、イメージがすぐに湧かないのではないかなと思いますので。

○黒須良次（委員）

通常こういうプロジェクトの基本構想レベルでは、まずその大きなコンセプトが、加藤委員おっしゃったコンセプトですね、まずスコーラとか、いろいろこういうゾーンにしていきたいと思いますとかいう考え方のコンセプトがあって、そのことに大きなゾーニング、そのゾーニングをどうするかというのは、その施設周辺の台地のゾーンと、それから既存集落というのですか、それからその周辺の田園集落のゾーンとか、それぞれこういうゾーンで構成していきたいと思います、それぞれこのゾーンはこういうふうな方向で整備していきたいと思いますとか、こういう魅力をどんどんつくっていきましょうという基本方針がそこに柱が立っていくのですよね。主要な検討施設としてはこういうものがありますよという、あるいはそれからゾーンと、さらにそこにアクセスですか、動線計画、どういふふうに動線を考えるかという計画がくっついて、それからもう一つは事業方針として、どういふ事業手法というのですか、具体化する手法をどういふふうにしていきたいと思いますかという大まかなアウトラインですか、そういったものがくっついて一つの基本構想としてのパッケージができる。通常基本構想というのはそういう感じのものです。

○加藤文男（副委員長）

黒須委員の言われた最後から2番目まで、最初のほうも3つは今回頑張っていけるかもわからないですけども、まだハード、動線が決まっていないところがあるので。実際のほうは、上のことだけでまとめて。

○川砂智行（事務局）

おっしゃるとおりだと。黒須委員おっしゃられたことは。

○加藤文男（副委員長）

わかりやすいのではないですか。

○川砂智行（事務局）

ええ。最終答申を今前提としたお話だと思うのですが、まだ中途の段階ですので、今おっしゃられた前半の3つの部分を簡明に説明できればなど。ただ、その中で、現場別の説明というものがどうしても必要になるのかなというのがちょっとあるのですけれども。トータルの取り組みとしてはスコーラ的に。

○福川裕一（委員長）

現場別にしても、大きく分けるとこここここの集落。

○川砂智行（事務局）

あとは里山。

集落と包括しますか。

○福川裕一（委員長）

自然丸ごと博物館の全体の一部ですよ。その中でも主要な要素ですよ。そこでやることを、そんなに細かく挙げなくてもいいような気がしますが。

○川砂智行（事務局）

では、全体を丸ごと博物館として、スクーラとしての大きな網の中に、高台で展開するものと、集落及び里山も含めた集落で、里地里山ですよね。集落も含めて。そういった概念もとれると思うのですが、そこで展開する。

○渡邊忠明（委員）

谷津田を含めた里地里山。

○川砂智行（事務局）

ということですね。そういう2つの柱、展開する現場としてはそういった2つの柱で説明するということですか。

○福川裕一（委員長）

そうです。もうこちらは生活環境。

○川砂智行（事務局）

ただ、取り組みとしては、それぞれの取り組みが単独、独立しているということではなくて、複合的に機能し合って、相乗効果を狙っているという前提でよろしいですか。

○福川裕一（委員長）

はい。なかなか還元が難しそうですけれども。

○川砂智行（事務局）

先ほどのインフラ関係は、委員長先生のご説明も使わせていただいて。

○福川裕一（委員長）

空き家って結構あるのですか。

○大谷芳末（委員）

あるはずですが。把握はできていませんけれども。

○福川裕一（委員長）

この滞在型市民農園とか、いろんな市民の応援隊みたいな人なんかも。滞在できるようにうまくつくるとのことですよ。集落のほうはね。

○川砂智行（事務局）

もともとの案の中では古民家の再生がありました。ただ、その古民家を選定するのがちょっと。

○福川裕一（委員長）

いや、別に古民家だって、そんなに古くなくたっていいのですよ。

○加藤文男（副委員長）

空き家でいいです。

○福川裕一（委員長）

空き家でいいです。変なRCなんかは嫌だけれども。結構瓦の屋根がいっぱいある、立派な家があるから。空いている家があれば、それを使えるのですけれども。

○小野明（委員）

質問で、事業主体はどんなふうにするのですかねとか、質問はないですか。

○大谷芳末（委員）

おそらく出ると思います。

○福川裕一（委員長）

もちろん一番気になる場所ですから。

○小野明（委員）

みなさまですよ。

○福川裕一（委員長）

それは、吉田の人々にできるだけ利益が上がるような、しかも成功するようにね。

○川砂智行（事務局）

地域振興策の総合パッケージの一番最後のページに備考欄とあるのですけれども、ページでいうと41ページです。そこに念のため付記しておいたのですけれども、今後検討しなくてはいけない要素を幾つか書いてあります。逆に言うと、こういったものがまだ未検討な状況で、中途の段階で意見交換に臨まなくてはいけないということですね。そういった事業主体もそうですし。

○渡邊忠明（委員）

そういうように、まだやわらかい段階で皆さんのざっくばらんなご要望をお聞きしますと、そういうスタンスではないですか。

○川砂智行（事務局）

そうです。事業それぞれ課題もあるでしょうし、整理しなくてはいけない問題もあるでしょうし、いろいろあるのですが、それは次の段階でやっていければなど。

○渡邊忠明（委員）

備考のところに、ちゃんとさっき言ったゾーニングが台地、集落、里地里山で、一番後ろに出てきているのです。

書いてはあるのですが、場所が一番最後で。私気がつかなかったな。

○川砂智行（事務局）

ここに書いてあるのは、こういった展開する場所も実は委員で決めるということではなくて、最終的に地元の皆さんと組合との対話、協議により決定することをお示ししているところです。

○小野明（委員）

つまりこういうふうに分けたほうが、自分達のイメージが湧くのではないかということですね。

○川砂智行（事務局）

はい。

○小野明（委員）

これは吉田区の方々がどういうふうに絡むかは表記したほうがいいですね。

○川砂智行（事務局）

それがまだ全く。

○福川裕一（委員長）

それが課題だ。やりたいことは大体出てくるけれども。

○川砂智行（事務局）

④番に受け皿組織の設立を要すと、最後締めを書いてありますが、そこが関連するところなのですけれども、その辺の審議がまだ委員会の中で取りかかっておりませんので、明確なことを今の段階で地元の方にご説明するのは難しいのですけれども。

○福川裕一（委員長）

ご意見を聞くのはいいのですか。

○川砂智行（事務局）

そうです。ご意見をまずは聞くと。

○福川裕一（委員長）

できる限り自分たちでやりたいですね。全国公募による外食店と書いてありますけれども。

○大谷芳末（委員）

正直言いまして、私が生きているうちは、私はやりますよと言いますけれども、あと10年で終わるかも知れないし、受け皿と考えたときに一番悩むところです。

- 福川裕一（委員長）
あと、初期投資の問題がありますね。
- 大谷芳末（委員）
それだけ思想を持った人材がそろうかと。
- 小野明（委員）
人がいても人材いないという。
- 加藤文男（副委員長）
でも、事業やると、人材が集まってきますよ。
- 大谷芳末（委員）
でも、余り心配してもしょうがないので、それも3市町にやりたいという人を求めてもいいのではないかなとも思います。吉田で受け手がなければ。3市町のメリットになりますよね。
- 小野明（委員）
そうすると、何のために吉田区の振興なのだとなってもね。
- 福川裕一（委員長）
いやいや、吉田区にあるから。
- 小野明（委員）
でも、吉田区の人たちは関与しないと。自主的にね。
- 福川裕一（委員長）
いやいや、取り組みが進めば。
- 大谷芳末（委員）
人それぞれあるではないですか。資質もあるし。私は雇用だけでいいよという方もいれば、私は掃除係でいいよという人もいれば、そんな何かを経営する大それたこととはいう人もいるでしょうし。
- 渡邊忠明（委員）
私の頭の中には吉田株式会社がこびりついてしまっているのですけれども、それがどういう格好であろうがその受け皿があって、だからその中で暇な時間お掃除行ってやっていいよとか、リサイクルの選別でちょっと小遣い稼ぐよとか、いろんなパターンがあっていいと思うのです。多分吉田、先ほど来話を聞いていると、どうも吉田区だけでは人が賄えないというのだったら、やっぱり2市1町で考えればいいお話なのだと思うのですけれども。
- 福川裕一（委員長）
これが雇用を生み出せば、それは大したものです。
- 加藤文男（副委員長）
マネジメントが少し心配だと言っているのです、会社の経営というと。
- 大谷芳末（委員）
ここには、中間管理職も含めて、経理のプロも含めて、やはりそういう普通の小規模でいいですけれども、ちゃんと法人の体をなすような人材がそろうかということですが。
- 小野明（委員）
これは、相当行政のバックアップが必要ですね、最初は。
- 大谷芳末（委員）
今のところは、まだ具体化していませんので、元気のいい方はみんな俺がやるとか、何人かいますけれども、本当にいるわけです。
- 渡邊忠明（委員）
今日、明日であれば、大谷委員がリーダーになられて、それでこの2市1町というの

は割と教養の高いスキルを持った方がいっぱいいますから、65以上のまだ働ける方を使って、地元の人も何かしらのお仕事ができてと。そこは柔軟に考えておいていいのではないですか。

○大谷芳末（委員）

柔軟でいいと思うのです。私の個人的な願いは、何とか私個人的な考えですが、コミュニティを存続させたいと思っているわけです。その行き方は、どうでもいいと思うのです。もうそのうち地図から消え去るようになってしまったら困るので。そういう意味では、吉田の人たちがある程度子孫を残せて、自分たちは雇用だけで御飯を食べるのもよいし、経営者は3市町から来てもいいしというふうに思っています。

○福川裕一（委員長）

大体よろしいでしょうか。

○川砂智行（事務局）

はい、ありがとうございます。

では、先ほどご説明しました細かく分かれているものが、個々の情報としては当然必要だと思うのですが、ご説明に当たっては集約化する方向で。集約化に当たっては、先ほどの地域丸ごと博物館というようなものであるとか、スクーラとしての考え方のもとに展開するとか、そういった大きなまず網を考えて、その下には展開する、大きく展開する、台地上で展開するところと、里山を含めた、集落も含めた里地里山として展開するものということで、あと、機能についてどう触れるかというのは今ちょっとまとまらないのですが、細かいところは後ほど加藤先生と福川先生にご相談させてもらってよろしいですか。

○福川裕一（委員長）

ですから一番のエンジンはこれだけなのです。これをエンジンにして、第2、第3の策になるようなものを。

○川砂智行（事務局）

そうですね。かなりの取り組みが集約化できます。

○福川裕一（委員長）

あと、派生的にこういうことは可能と。基盤としては、丸ごとミュージアム。

○渡邊忠明（委員）

それと、いつも小野委員が言っていらっしゃる印西市とのリレーションシップをどうするかという。

○川砂智行（事務局）

まずは、この事業につきましては、3市町における広域事業として行っておりますので、まずは組合として、組合事業としてこういうふうに進めたい、進めるべきだというものまずは確立したいと思えます。その上で、確立したその事業を効率よく執行するために、地元印西市のこういった部局の万全なるバックアップが必要だとか、そういったことになれば、それからちょっとまたいろいろ地元の印西市さんとの相談を深めていくというような段階的な取り組みでよろしいかと考えております。

○小野明（委員）

各市あるいは町、行政のほう、余り予算もそれは少ないでしょうから、ですからできるだけ国とか、ほかのところの、国の政策、さっきのまさに強靱化政策、国家の防災ではないけれども、防災とか観光とか、地域創生とか、できるだけいろんなところをうまく、内容はこれだけにしても、うまく化粧直しをして、そのところからできるだけ予算を持ってきて、できるだけ組合なり、あるいは印西市も含めてですけれども、市や町の負担も余りかからないような形で、それは知恵を絞っていただくというようなことですね。

○川砂智行（事務局）

そうですね。いろいろパッケージが固まれば、次にそういった事業費の圧縮の検討も具体検討進められますので、次のステップでは、そういったことも含めた課題について整理をして。

○小野明（委員）

新国立問題も、あの偽物のものも、これはいいのだけれども、実はこれだけの負担が何百億だなんていうと、またね。

○渡邊忠明（委員）

印西市ではなくて、やっぱり白井市や栄町もそれなりに。

○川砂智行（事務局）

もちろん総力戦になろうかと思います。

○小野明（委員）

そういう意味では、できるだけ周りも協力しやすいような環境をね。

○川砂智行（事務局）

公共事業としての大義を大きく。

○小野明（委員）

我々は町民税や市民税払っているからね。ひとつよろしくお願いします。

○川砂智行（事務局）

はい。

では、次の議題に移ります。

次第7 その他

○福川裕一（委員長）

はい。続いて、その他。では、どうぞ。

○川砂智行（事務局）

それでは、次第の7番、その他ということで、ご連絡事項が4点ほどございます。

まず、1点目でございますが、先進地視察でございます。本日皆様に配付した大谷委員からの意見書でも触れておりますが、あらかじめ皆様にご連絡したとおり、9月27日に開催する第5回会議で審議を進めたいと考えております。

2点目につきましては、施設整備基本計画検討委員会での報告事項でございます。先ほどご説明、そこの航空写真のほうで差し上げましたが、9月13日に開催する施設整備基本計画検討委員会の第5回会議において、地域振興策の熱利用施設への可能供給熱量を審議すると。エネルギーバランスについて審議するという事です。つきましては、9月5日の意見交換会の後、熱及び電気の供給を前提とする地域振興策のリストを作成いたしまして、委員長、副委員長にご確認いただいた後、施設整備基本計画側へ報告したいと考えております。

3点目が9月5日に施設整備基本計画検討委員会と合同開催する関係町内会との意見交換会でございます。意見交換会に提出する資料といたしましては、本日皆様にごらんになっていただいた資料をベースとしつつ、先ほど決していただいた事業全体を取りまとめる新たな資料を作成してお渡ししたいのですが、ご説明に当たっては、いろいろと地域振興策のイメージがどなたでもすぐ湧くような写真をスライドして、その写真で説明するような方向で臨みたいなというふうに考えております。

○中野竜一（事務局）

9月5日の施設整備検討委員会と合同で開催の周辺住民意見交換会ですが、当初吉田

区さんだけということだったのですが、急遽、先ほどお話ししました、現在反対を表明してございます松崎区さんのほうからも意見交換会の開催について行ってもよいというご報告がございましたので、9月5日の14時から、松崎区さんを対象としました周辺住民意見交換会を吉田区さんの意見交換会前にやらせていただくことになりましたので、ご報告させていただきます。

○川砂智行（事務局）

それと、最後ですが、次回のこの地域振興策検討委員会の会議でございますが、予定どおり9月27日の日曜日13時からとなります。開催通知は、後日皆様に送付をいたします。

連絡事項は以上でございます。

○福川裕一（委員長）

以上事務局から4点の連絡がありました。

質問などはありませんでしょうか。

○大谷芳末（委員）

施設の委員会でも伺っておりましたが、おそらく松崎区もやるということになれば、松崎区への説明の仕方と、おそらく吉田区に対する説明の仕方というのは、相手のスタンスが全然違うところですから、よくよくうまくるように配慮してもらわないと、委員長が困ると思います。全く同じ説明はあり得ないと思います。

○川砂智行（事務局）

ご説明につきましては、力を入れる点はもちろん違ってくるかと思うのですが、ただ資料につきましては、基本的に同じ資料でないはずかと思っております。説明するジャンルごとの割く時間については、これから十分に検討を進めたいと思います。

○福川裕一（委員長）

ほかにもございますか。

はい。

○渡邊忠明（委員）

冒頭申し上げましたように、次期施設整備基本計画委員会におきましては、リサイクル品の展示販売だけではなくて、リユースもぜひご確認をお願いします。

○川砂智行（事務局）

承知いたしました。その点について、リサイクル品の展示販売としているのですが、実際にはリユースしたものを展示販売しておりますので、その辺ちょっと表現の仕方も含めて、間違いがないようにしたいと思います。

○大谷芳末（委員）

リユースとリサイクルってどう違うのでしたっけ。

○渡邊忠明（委員）

要するにリユースというのは、例えば乳母車ありますよね。うちの子大きくなったから、ほかの人に差し上げます。何もしないですぐ再利用できると。リサイクルというのは、何かサイクルをして、例えばペットボトルだったらそれを溶かして、成分を分解させて、また同じものをつくると。要するにエネルギーが加わるわけですね。リユースはそのままやるから、エネルギーなしで続いていくと。

○福川裕一（委員長）

ちょっと直したりするのがリユースなのですね。

○渡邊忠明（委員）

少しの直しまではリユース。要するにリサイクルにはエネルギーがかかるものだから。

○福川裕一（委員長）

普通はリサイクルショップというのと、前者らしいですね。

ほかにいかがですか。

○黒須良次（委員）

松崎区への説明ということなのですが、今までの検討の中に入っていなかった点で、印西地区どこの集落も結局生活道路というか、集落の中の道ですね。どこも非常に困っているという現実ございますよね。松崎区においても、ここに市道の、この施設の生命線となる市道が今度松崎区を通ってくるわけですね。そうすると、やはり隣接として、基本的にこの吉田区の集落と同じように考えた道路、これも関係する道路とか交差点の改良ですとか、安全性向上とか、そういったところ、その地区の抱えている課題に対して、地域の意見聞きながら対応していきますというような方針というのは、この段階で今松崎区の代表の方いらっしゃる席ではと思うのですが、基本的にそういう姿勢というのは、アプローチ道路が松崎区を通るということもございますし、やはり交通の問題、少なくともそこら辺の地域的な課題については対応していくという何か考え方を、事前に表明しておいたらどうかなというふうに考えたのですが、それで当然検討すべき課題なのかなと思ったのですが、そこら辺事務局としてどんなお考えでしょうか。

○川砂智行（事務局）

今そういったことも含めて、想定質問を考えています。その中で整理を進めたいと思っております。今の段階で、まだ最終結論できておりませんので、その辺も含めて、こういう質問をされるだろうな、こういうことを気にされているのだろうなということは、まとめておきたいと思っております。

○福川裕一（委員長）

他にありますか。

[発言する者なし]

次第8 閉会

○福川裕一（委員長）

では、本日の会議を閉会といたします。

お疲れさまでした。